



英国春秋

2025年 春号
ISSUE 46
(令和7年)
発行 英国日本人会

はじめに



いろいろ彩りの少ない冬の庭を華やかにしてくれるのが、わが家ではヒースの花です。この花は11月の中頃から咲き出し、冬の間はもちろん、どうかしたら4月頃まで、濃いピンクの小花を咲かせてくれます。その昔日本で、ブロンテの小説に憧れ、いつの日かヒースの丘を彷徨えるのを楽しみにしていました。今から半世紀も前、彼の地ハワースで、まるで赤紫の厚い絨毯を敷き詰めたように一面に咲くヒースの丘にたち、宿願を果たすとは少々大袈裟ですが、その夢を実現しました。本来、ヒースとは荒野を意味する言葉だそうですが、そこに咲くツツジ科の低木で、日本ではエリカと呼ばれるのが一般的です。和名では舌を噛みそうなギョリュウモドキと呼ばれ、ノルウェーの国花でもあるそうです。

先日、BBC4で伊藤詩織さんの「Black Box Diaries」と言うフィルムを観ました。ジャーナリストとしての仕事のアドバイスを得るつもりで出かけた先で、著名なTVプロデューサーからレイプされ、その責任を問う裁判沙汰に、25歳から33歳までの歳月を費やし、戦った彼女自身の記録映画です。彼女のストーリーは既に世界中に発信されていますので、詳細は省きますが、無法なことに対する怒り、そしてその罪に対して加害者からの謝罪を求めて、長期間、最後まで頑張り続けた、勇気と忍耐力に、心から敬意を表したいと思いました。彼女の戦いは#MeTooムーブメントが始まる前の、たった一人で始まりましたが、最後は多くの賛同者をえて、日本での性犯罪規定を見直す運動にまで発展しました。改正刑法で、不同意性交等罪が2023年7月に新設されたそうです。

昨年の暮れ、Foyles書店で山のように積み上げられた「Butter」と題名のある本を眺めていたら、店員が近づいて来て、「この本はとても面白かった、あなたも読むことを薦めるわ!」と話しかけられました。ついでに彼女のコメントを聞かされたあと、別の店員がやって来て、同じく薦められ、コメントがまた延々と続きました。この「Butter」の作家はゆずき あさこ とあり、タイムズ紙のベストセラーズ欄で数週間にわたりトップを占めていたのを知っていました。それで、我が家に積まれた未読の本の山を思い浮かべながら、内容知らずの衝動買いをしてしまいました。やはりタイムズ紙の書評欄で取り上げられたのに、「Under the Eye of the Big Bird」かわかみ ひろみ作があり、それには奇妙な、反ユートピア郷が描かれている・・・とありました。ここ数年、ロンドンの書店に並ぶ日本人作家、多くは女性、の本が増えたことは驚くばかりです。うろ覚えですが Convenience Store Woman や Breasts and Eggs などがあり、やはり女性作家。前述の書評で、「村上春樹は最近ではもう古い!」と書かれているので、時の流れをしみじみと感じてしまいました。まさに昭和は遠くなりなけりですね。

シベリアのある強制収容所が昨年2月16日に、アレクセイ・ナワリヌイの死亡を発表しました。多くのメディアが“殺された”という言葉を使いましたし、我々もプーチンの仕業だと思いました。しばらくしてナワリヌイの「PATRIOT」パトリオット、プーチンを追い詰めた男の最後の手記が日本語版と英語版共に同日、10月22日に発行されました。

幾度も逮捕・投獄・活動妨害・毒殺未遂の目に遭いながら、それでも祖国ロシアを民意が代表される国にしたいという愛国心に燃えた彼の活動に、常日頃敬意と称賛の思いを抱いていました。先日一時帰国時、日本語版を購入しました。この春号で、「21世紀のおとぎ話・ゴリアテを打ち倒せなかったダビデ」を副題に・・・と思いながら雑用に追われ、次号になってしまいました。そう言えばもうすぐ2月24日、ウクライナがロシアから戦争を仕掛けられた日で、以来3年が経ちます。膠着状態が続く中、終戦への動きが見えだしましたが、はなはだ公平を欠く仲裁者の介入で、先行き不安極りなしです。

(20/02/25)

* * * も く じ * * *

はじめに		2
もくじ		3
おとぎの国の現実	加藤節雄	4～5
パンチャカルマ Detox の旅 in 2015 インド編	フィンチみつえ	5～6
ロンドン生活今年で50年	田村陽子	7
英国春秋歌壇	春を待つ心	バロー典子
Sのこと	石山望	9～10
私の住む町 Barnet	須永静江	11～14
宇宙と愛	ネット文化サロン	15～18
英国春秋漫画うちのふうちゃん・お知らせ&Puppy 編	ミルロイ美紀	19～21
英国春秋俳壇	みかん	エリオットつや子
彼岸について	石井建心	23～24
野生動物と人との共存を考える	ビドル恵	24～28
COP3 と「Kyoto」	小川のり子	29～31
英国春秋あれこれ		31
Tokyo College of Sushi & Washoku、London		
マスタークラスに参加して	吉村ウッド珠美	32～33
古典籍スクール16&17 竹取物語他	ブランド啓子	34～36
開かれた男	石山望	37
影を慕いて	園部健治	38～39
はじめての自伝	小川典子	39～41

特別寄稿

石井建心氏
小川典子氏
園田健治氏

三輪精舎舎主
ピアニスト・ギルドホール音楽院教授他
在英国日本国大使館参事兼領事
(アイウエオ順)



おとぎの国の現実

加藤節雄

我々は今から 50 年前に東京で結婚した。そして新婚旅行は沖縄だった。当時の沖縄はアメリカの占領時代が終わったばかりで、日本というより外国へ行くといった感じだった。東京から船で向かい、友人に紹介された浜比嘉島という小さな島の民宿に泊まった。海岸は遠浅で岩山があちこちに点在し、まるで絵に描いたような美しい風景だった。何も無いところだった。サンゴの石で囲われた塀の中には赤い



瓦の平屋の家が並び、ハイビスカスやブーゲンビリアの花が咲き競い、家の周りにはバナナや棕櫚（しゅろ）が鬱蒼と繁っていた。屋根の上のシーサー（獅子像）を見たのも初めてだった。夕方になるとどこからともなく三線の音が鳴り響き、各家から人が道路に出てきて踊り出す。踊りの列は村の広場まで行進し、そこで輪になって全員で踊りだす。三線を弾く人、声に自慢のある人が声を張り上げて歌い、全員が拍子を取る。島の人全体がミュージシャンでありダンサーなのだ。旅行者の我々も見よう見まねで踊りの輪に加わり、村の人たちと一緒に楽しく踊る。日本にもこんなところがあるのかと思った。沖縄はそれ以来我々の心の中に確固たる位置を占めた。

今回、結婚 50 周年を記念して、昨年 11 月に再び沖縄を訪れることにした。50 年といっても再訪が 50 年ぶりというわけではない。特に私のワイフのジルは新婚旅行以来すっかり沖縄が気に入って、沖縄の陶芸家の家で制作したり、那覇のデパートで個展を開いたりして、すでに沖縄各地に 4 回ほど行っている。私も彼女が那覇のデパートで個展を開いた時には手伝いに行っているのが今度で 3 回目だ。しかし、個展が開かれたのは 1997 年で 27 年も前である。沖縄も変わってしまっているだろうとは想像していた。現代の世の中、昔のままの姿でいられるはずがない。案の定、空港からして今では国際空港として国内便だけでなく、多くの国際便が発着し、那覇中心地まではモノレールが走っている。国際通りに面したホテルに宿を取ったが、その賑やかなことはまるで東京・渋谷の交差点にいるような感じだ。国際通りにはお土産店やレストランが建ち並び、各店からは沖縄の島唄の音楽が大音響で流れ、道路は中国や台湾からの観光客で溢れている。沖縄の発展・繁栄を喜ぶ一方、ちょっとした不満も感じた。石垣島、竹富島、西表島の離島にも出かけた。本島に比べれば静かで落ち着いた雰囲気があった。石垣

では伝統的な赤瓦の屋根にシーサーの置かれた民宿に泊まった。港にも近く、レストランや居酒屋もそばにあり便利な場所だった。ここから日帰りで竹富島へ出かけた。小さな島で伝統的な家屋や家並みがよく保存されており、いかにも沖縄に来たと思わせてくれる風景だ。ここでは自転車を借りて島を一周した。小さな島だが観光客がたくさん押し寄せるので、入場制限をする案があると聞いた。また入島税を徴収する案もあり、すでに任意だが支払いを請われた。世界の旅行ブームは沖縄にも押し寄せている。円安による割安



感から東京や京都には世界中の旅行者が集まってくる。沖縄の置かれた位置関係から、ここには中国や台湾、そして東南アジアからの観光客が多い。地元の経済には貢献しているのだけれど、道路やホテル建設といったインフラ整備が必要だし、それに伴うゴミや公害、交通混雑も問題だ。すでに世界の大きな観光都市の中には入場税を徴収したり、人数制限をしているところもある。西表島の浜辺にはプラスチック・ゴミがたくさん流れ着いていた。地元の人たちが年に 3 回はゴミ収集をするそうだが、流れ着くゴミは後を絶たないという。中国語の書かれたペットボトルが多いという。

こんなところにも国境に近い悩みがあった。NHK のドキュメンタリーで「台湾有事の際の与論島の防衛」に関する番組を見た。自衛隊を受け入れることで島の発展と防衛体制をどうバランスを取って構築していくのか選択を迫られているという島民の悩みを伝えていた。沖縄を旅行するとあちこちに米軍基地があることに気が付く。那覇空港には自衛隊の軍用機が並んでいるし、石垣島の港には海上保安庁の巡視艇が多く停泊している。沖縄の特殊な位置を考える時、平和の尊さをますます痛感した。私たちは今回の沖縄の旅を大いに楽しんだ。美しい自然、南国の植物、きれいな海、おいしい沖縄料理、オリオンビールや泡盛、沖縄の人のもてなし、50 年後に訪れた沖縄は変貌していた。観光インフラが整い、システム化されていた。50 年前には民宿しかなかったのに今ではホテルが建ち並び、道路は整備され、空港も国際空港となっている。第 2 次大戦から 80 年、悲惨な被害に遭った沖縄は、今日繁栄している。この発展を保ち続け、いつまでも心の中の「おとぎの国」であって欲しい。



パンチャカルマ Detox の旅 In 2025 インド編～

内田フィンチみつえ

さて今回は私がインドに行き体験したお話を少しさせてください。2月中旬から末まで約2週間

インドはタミルナドゥー州(チェナイ、旧マドラスが首都)にある Yogiville (<https://www.ashoktree.com/>) というヨガとパンチャカルマで有名なリゾートへ行ってきました。最初は「パンチャカルマ」だと思い、パンチを利かし、健康に良いスパ/マッサージでリラックスと思いきや、大外れでした。そこで、私は身体の洗浄を受けたのでした。アーユルヴェーダの病気治療には二種類あり、鎮静法と浄化法です。1つ目の鎮静法には、主に食事療法、健康法(ヨガ、瞑想)、自然の植物、鉱物、金属などを自然界の物を使用する療法です。そして私が参加したのがどうもこの2つ目の浄化法の、パンチャカルマ療法でした。サンスクリット語で「パンチャ」は5、「カルマ」は行いを意味し、5つには催吐法、催下法、経鼻法、経腸法、瀉血法があります。パンチャカルマを行う前には前処置として、オイルマッサージ(アビヤンガ)、



発汗法が行われます。現地に入って、初めてこの5つの浄化法を知り少し青ざめたのでした。それはもう後退りできず 12 日間缶詰状態でこの療法を受けることになるとは。

まずコンサルから始まり、私のライフスタイル、古典医学に則って私は水と火の要素からできているようでした。最初の2日間のはんびりと、しかし食事はいたってシンプル、でも美味しくいただき、不思議と俗世界の所謂「うまい」と言われるものが恋しくなくなり、毎日2度(午前、午後)のオイルマッサージにうっとり、時には骨が砕けるのではと懸念したことも。。でも次回からはその方は外していただくことになりホッと！そして3日目から洗浄が始まります。薄めの塩水を一気に約1-2Lを飲み吐き気を催したらそこで



Vomiting, すべてのお水や胃の中の物を吐き出して、このセッションは終わりです。私は、戻すのにエネルギーを費やして、疲労感を感じるが、お昼過ぎには気分はよくなり、ここでいただいた塩を少しふったシンプルな炊き立ての白いご飯が胃の腑に心地よく響き、最高に美味しくご馳走とを感じるから素晴らしい！！美味しくて笑みが自然と溢れてくるのでした。そして中1日休みを挟み、今度は腸の洗浄。

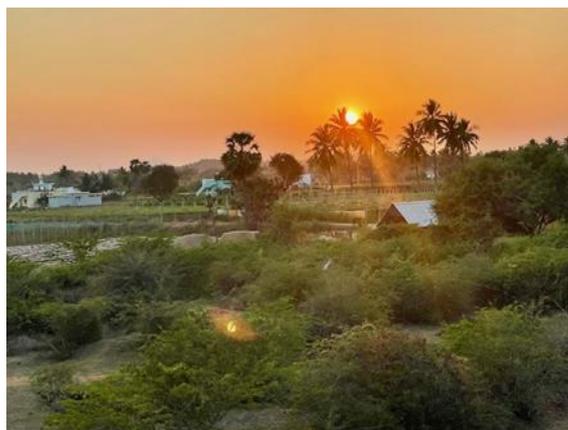


水を10分おきにコップ2杯を約1時間飲んで、催してくるのを待つと、何と1時間で21回もトイレに行きました。これは私の人生で最多記録です。勿論朝一番に薬草を飲んだので、水を飲むことで催しが誘発されたようです。それから1日休みを挟んで、今度は鼻、喉の洗浄です。鼻のネティポットを使って片方の鼻の穴から水を垂れ流し、もう一方の鼻の穴から流しだす。意外とこれは見た目よりも簡単にできた様です。

そして次の耳の中に油を注がれた時は少し躊躇するも、その後温かいオイルで耳のマッサージと掃除をしてもらって、何と右耳が少し難聴気味だったのが改善したようです。最後はEnema(浣腸で腸内環境を改善)を2日に分けて行う。そしておしりから水分を流し入れて、腸に溜まるのが分かるのだから、そしてその刺激により排便を催し、最後は宿便が出てくるというようになっている。何でもこのキットはアマゾンで購入可能とか、私は普段日常ではこの手段は不要で自然に催してくれるので、本当に感謝するのみです。

このような恥ずかしいことを自然にさせられるこのパンチャカルマ、ドクターのラデイカ女史を尊敬するのみです。彼女を信頼し兎に角任せてやれたことが今回の成功の秘訣かと思います。またスタッフの方々も素晴らしく、冷静沈着また丁寧で親切！！ご興味のある方はご紹介いたしますのでご一報ください)

そして最後はアーユルヴェーダのトリートメントでお決めつけの、第3の目に向けてオイルを45分流しこみ、交感神経と副交感神経のバランスを取るとのこと。然しそれはどうも本当のようで、この療法が終わってから既に1週間経った今も何だか自分が自分でないような、落ち着きはらっている私ではないですか。そして、静寂な自分をもう一人の自分が見ているような気分になるのです。このパンチャカルマを受けて身体の洗浄はもとより、私は、何とインドの太陽が此処まで大きく、そしてここまで濃いオレンジ色で、ここまで私の感情に訴えてくるとは思ってもいかなかったのです。何よりも日の出、そして日の入りを毎日礼拝し、それを見ていると全てに感謝の気持ちが湧き、この太陽の無限さが今でも心に残り眼がしらに焼き付いています。これぞまさに心の洗浄でした！！そして、身体の方は2キロ体重が減り、コーヒー、アルコールは飲んでおらず、甘いものも欲しいと思わず、日々地に足が付き、満たされている気がする為に、俗っぽいものを欲しないのでしょうか。この効用がいつまで続いてくれるのか疑問ですが、兎に角、今の自分でない自分を充分堪能したいものです。



ロンドン生活今年で50年

田村陽子

ロンドンに住み始めて、今年で50年になる。

来たばかりの頃、慣れない仕事に苦勞し、そのうち子育てに苦勞し、そして夫は19年前、2年の闘病の末、天国へ旅立っていった。

私は心の空白を埋め合わせるために、近くにあるコーラスグループに参加する事にした。50名余からなる混声合唱団だ。1年に3回のコンサート、2年おきの合宿。楽しかった!



私は小学生の頃から合唱が好きで小さな妹に歌わせて私は低音をハモって楽しんだものだ。

この合唱団で10年余、楽しんだ。その頃紅葉会のメンバーがバイオリンを習っていらっしゃる事を耳にし、私も始めてみようかと思った。子供の頃習った事があったので、もう一度始めてみたいと思ったのだ。70歳の時だった。練習は大変だったがレッスンはとても楽しかった! レッスンはずっと先生との2重奏だった。6~7年のレッスンの後、2重奏よりもっと大勢で弾いてみたいと思うようになり、近くの室内楽に参加した。バイオリン、ビオラ、チェロからなる14~5人のグループだ。20分のtea breakをはさんで2時間はあっという間に過ぎた。タームの終わりに発表

会を開き、演奏後各自持ち寄ったワインやスナックを囲んで、招待された友人と共にお喋りを楽しんだ。

このグループに4~5年いた頃、なんとなくもっと別の音色を奏でるグループにも参加したいと思い、友人から紹介された所へ見学にいった。指揮者も演奏者も違い素敵な音色を聞き、気に入ってしまった。そして次の週から参加する事になった。このグループは17~8人からなり、コントラバス奏者もいた。会長、会計、セクリタリがいて組織がしっかりしていた。年に一度の総会もある。

子供の頃始めた楽器を老後になって再び始める事になろうとは思ってもしなかった。退職後、退屈になるのだろうかと思いきや、2つの室内楽の練習でヒーヒー言っている毎日である。楽器を習わせてくれた亡き両親に感謝せずにはおれない。

夫を失った事により、日本人共同墓地にお世話になり、そして日本人会に繋がる事となった。そしてそこで音楽の友に繋がり、バイオリンに繋がり今がある。人間とは人と人の間で助け合って生きるものなのだ。日本人会はその最たるグループではなからうか。JAは素晴らしい共同体だ。

“人という漢字は支え合っている”事を示しているではないか。

JAの皆様、異国の地にあって、今年も仲良く協力し合って前進致したいものですね。

人は皆、誰ひとりとして同じ者はいない。皆違って皆良いのだ。

それは丁度室内楽の楽器がみな違って、それぞれ個性のある音色を奏で、それが1つになって妙なる美しい音色を作り出すようなものではないだろうか。



ロンドン生活50年。不思議なしあわせを噛みしめついる今日この頃だ。

英国春秋歌壇

パロー典子

春待つ心

裸木の 灰色の空 背景に
天を指しつつ 静かに立てり
きさらぎの 花なき庭の 片隅に
スノードロップス ひそと咲きおり
楽しみは 花を買い来て ゆっくりと
息子の焼きし 花瓶に生ける
百合の花 蕾のままに 求め来て
徐々に開くを 春待つ心

夫共に あるを喜ぶ 今日の日
今を大事に ふたりで生きむ
老いの身の また来る春は 知らねども、
ありて嬉しく 無くてまた佳し
四季ありて その時々 喜びに
心ふるわせ 過ぎ来し日々よ
たれこめし 雲の開きて 一瞬の
光の天地 浄土はここに

香港にて

やわらかい 幼き孫の 手を引きて
園に通いし 香港の朝
古き友 出合いの嬉し 香港の
古箏の音色 今も心に
みどり樹の 絶えること無き 香港の
師走の街の 多き人波
かつての日 草地でありし 深圳は
高層ビルの モダン都市なり

Sのこと

石山望

彼は、Sと言った。

私とは、中学3年の時、クラスで一緒だった。それだけの繋がりである。

私の家とSの家とは近かったので、よく下校時、一緒に帰った。その頃、京都の中学校には給食なんてなかったの、昼時、それぞれの家まで、ご飯を食べに帰っていた。その時も一緒。

彼の家には複雑な事情があり、例えば、彼と、彼の2つ上のお兄さんとは、苗字が異なった。お父さんは戦死。仏壇にその遺影があるだけ。軍服姿のリュウとした紳士である。



しかし、そのお父さんの姓も、また違う。

お母さんはおられた。私、このお母さんが好きだった。

Sとそのお兄さんとは、そのお母さんと軍服姿のお父さんとの間にできた私生児なのだと思う。

お母さんは、戦後、女手一つで、仲居をしながら、幼い二人の男の子を育て上げられた。立派なものである。また、どういう繋がりか知らないが、おばあさんという人がおられた。

Sの家は、豊かとはいえなかった。だから、Sもお兄さんも、中学の頃から、アルバイトをしておられた。その頃、Sの家は、借家の2階。もちろん、大人2人と子供2人で住むには、狭すぎる。

しかし、そこには、温かい「愛情」というものがあつた。私は、それに惹かれ、彼の家によく遊びに行った。引き換え、私の家は、図体こそ大

きかつたが、また家系図もきちんとしていたが、そんなの、見掛け倒し。「体裁」ばかり構う家で、私の家には、肝心の「温かみ」というものがなかつた。訪問客のまるでない冷たい家で、それが、私には、とても嫌であつた。将来、人が来やすい家に住みたいと願つたのは、その所為である。

中学を卒業したのは、Sも私も15歳のときの昭和35年。

その頃、京都の下町では、中卒で就職する生徒が、半数あつた。高校へ行くだけの学力は十分にあつたSであるが、母親思いの彼は就職という道を選んだ。三菱重工。しかし、こんな大会社に中卒で入ると、いくら優秀な人材であっても、将来の展望などというものはなく、前途は、入社時に決まっているのだそうである。彼、数年で見切りをつけ、退職。後は伝手を頼つて、京都西陣の帯会社に勤め始めた。最後まで大変優秀な社員であつたらうと思う。

彼は、私に随分優しくあつた。実にいろんなことをしてくれた。ただ、それには、経緯がある。

中三の三学期に大阪遠足というのがあつたが、このS、その費用(400円)が払えなかつた。そこで、私、彼には何も言わず、それを払つておいた。彼、それがよほど嬉しかつたのであろうと思う。

Sは、また、その後、自分自身の幸せな家庭にも恵まれた。通つていた夜間高校で知り合つた女性と結婚。3人の子供を授かつた。そして、それらの子供も結婚し、彼は、すぐにお祖父さん。

そうなると、彼の気になるのは、実にこの私のことである。一向に、結婚する様子がない。

私に、「結婚せい、」といつも言つた。「僕がこんなに幸せになれたのに、君は、どうして結婚しないの？」会うたびに、いつも、こんな按配であつたから、思ひかねた私、ある時、意を決して、言うことにした。私、彼に一部始終を、臆面もなく全てぶちまけた。

彼、そんなこと、思ひもかけなかつたようで、ちょっとビックリ顔。でも、その場では、「ありがとう」と言つてくれた。

ただ、その後がいけない。

彼、いつも私のことを「親友」だと思つていた様子であつたから、少なくとも、「わかつてくれるだろう」と思つた私が甘かつた。

それからと言うもの、私のことを「理解する」どころか、日に日に、よそよそしくなるばかり。

数年前から、京都に帰るたび、私、かつて、お世話になったことのお礼に、いつも、町中で、彼に食事を饗応していた。

しかし、そんなこと、したくも、されたくもないのは、お互い様。「義理の付き合い」とは、まさにこのことである。近年では、さらにその度合いが悪化し、二人の「気まずさ」は増す一方。

彼、私と「1対1」でいると、場が持たないものだから、中学時代の同級生（女性）を同席させる。もし、我々だけであるとすると、私の方をまともに観ないばかりか、敬語で話す。



「今日は、ご馳走になりまして、ありがとうございました。」
何て失礼なこと、しやはるの？私は、貴方に会う為に来ているのに、。

まあ、これで分かりました。

我々、子供の時に友達でしたが、実は、お互い、本当のところを知らなかったのです。まあ、お互いを買いかぶっていたのでしょうかね。彼はまた、スポーツ万能でしたから、私、そう言う格好のいい彼に憧れていたと言う節もあります。

それと、彼と私の性格の相違。

彼のお兄さん、福島におられるんですが、このSに言わせると、「福島て、なんにもあらへん」

私、これにはびっくり。

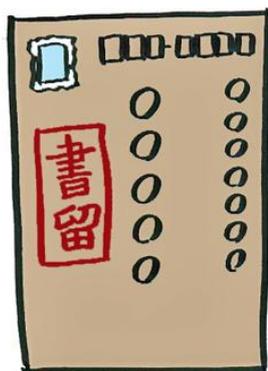
そりゃ、福島には、京都のように、お寺も神社もありません。でも磐梯山と言う大自然があるでしょう。それに美しく素朴な人情があるでしょう。

また、Sさん、「大阪って大嫌い！」とおっしゃるんです。

この時は、驚くより、彼の思考様式に呆れかえってしまいました。大阪は、おそらく日本一、「生活保護の必要な人を受け入れている所」だと耳にしたことがあります。

要するに、Sさんは、京都にしか興味のないお人。それも、北区とか上京区とか中京区、右京区とか。まあ、いかにも京都らしい綺麗な所。

そら、私と合わんわ。



私は、京都も、大阪も、福島も、栃木も、どこでも好きなんです。日本国中、京都みたいな所では困るでしょうよ。また反面、大阪みたいところばかりでも困ります。

そして、京都には、南区も伏見区も必要です。

Sさんのような人、京都に沢山おられますが、そんなこと言っていると、嫌われるのも当然。

4年ほど前、Sさんに一筆認め、書留で送りました。私の言い分をはっきりしたというだけのことです。

彼、奥さんには見せておられないと思います。Sさんは、まあ、そういう人なんです。

要するに、私、彼を知らなかったのです、。



私の住む町 Barnet

須永静江

私が現在住むバーネットの町は、私が 2018 年 9 月に引っ越してからの新しい生活体験の場である。今年も明けて、はや 2025 年。まわりは、個人の住宅が売りに出されるとその跡地に大きなアパートが建ち並び、人口が急増。その一番の弊害は、GP 登録患者の増加であろう。毎回、医者と face-to-face の予約を取るのが困難になり、病状がいよいよになるまで様子を見ることも多く、この先が危ぶまれる。

引っ越してすぐ、私は、地域の歴史研究グループの会員になった。自分が、どのような所に住むことになったのか、知る必要があると思ったからである。この会は、月に一回、夜 8 時から、ゴルフクラブの経営する manor house のレストランを借用して開かれた。年間の計画が立てられており、集会は、月々の短い近況報告の後に、招かれた講師が 1 時間ほど専門分野の話をする、と言うものであった。また、年に一度、調べ物をまとめた人達が、小冊子を発行した。私は、典型的な朝型(あさがた)の人間で、朝から午後の早い時間までは自分でしっかり考えて確実に行動出来るのであるが、午後遅くから、夕方になると、精神がたるんで考えるのがおっくうになる。それで、夜 8 時からの会合に出席するのは初めから努力を要した。それでも、初年度は、毎月参加していたが、次第に、興味のある話が予定されている時だけの参加となった。

年間のまとめの冊子内容は、第二次世界大戦に関するものが多く、ドイツ軍の空襲を扱ったものが大半であった。よそ者の私には、大雑把な話で充分であったが、この土地に生まれ育った人たちには、隣人や家族のつながりもあるのだろう。破壊された通りや学校の名前、被害にあった家族の名前や数字まで詳細に記録されていた。私は、図書館から借りた本や、自分で買った本を合わせ読んで、広くロンドンの大戦下の様子、大戦後の様子が概ね分かった頃、このグループの会員であることをやめた。



私の住むリタイアメント・フラット(独立して生活出来る退職者専用アパート)では、年間を通して様々な集まりがある。良く出席する人、全然出席しない人、などが居る中で、私は、その中間的な存在かも知れない。先日は、2024 年の Christmas Lunch に出席した。参加者は 30 名くらいだっただろう。飲み食いが始まる前に、ゆったりした肘かけ椅子に座って正面を、そして、ぐるり左右を見渡すと、私が引っ越した頃から居る residents は、全体の半数を割っていた。居なくなった人たちの中には、24 時間世話をしてくれるケア・ホームに移った人たちも多く、亡くなった人たちもいる。新しい顔ぶれの人たちとは、日頃は、挨拶を交わす程度のおつきあいであるが、このような会の時は、隣り合った人たちと興味のある話をする事が出来る。ゴルフが趣味の人たち。若い頃、作曲・レコードの制作・音楽評論をしていたと言う音楽派。絵を描く人。「メモワール」(回想録)を書いている人。毎日、gymに通う人。今なお、働き続ける人。などなど。今回、私の左側に座った人たちは、私にとって新しい顔触れだったので、「この土地の人ですか?」「退職まで、どのようなお仕事をなさっていましたか?」などを聞いた。そして、改めて、このアパートには、近所界隈から移り住む人が多いのを知った。

最近、昔を語ってくれる人が少ない。それで、私の一番の思い出は、引っ越して間もなく聞いた、ローリー(フローレンスの愛称)おばあさんの思い出話である。「彼女は、このアパートの近くに生まれ育った。ドイツ軍の空襲が激しくなると、両親から引き離されて、お兄ちゃんと一緒に、Cornwall の方へ学童疎開させられた。戦争が終わってこの地に戻った時には、自分の家は無く、Essex 州に新しい土地と家を見つけ、家族と共に住みついた。やがてお父さんの仕事の都合でロンドンに戻り、再びこの地に住み続ける事になった」などである。彼女自身は、この地の小学校の先生として働いた。



Children from London in 1940

ロシアのウクライナ侵略戦争は、一言で言うと、ロシアが平和に生活していたウクライナ人の土地をロシア領土に組み込む狙いで始められたものであろう。地上戦もあるのだろうが、テレビなどでは、多く、空襲による被害が報道され、その惨状は、第二次世界大戦中のドイツ軍のイギリス空襲を想像させる。

寒い冬の日。高位置にあるアパートの北空に、厚雲に隠れて姿無く上り来る飛行機音に耳傾けながら、明るさにはじける南国のホリデーよりも、地下に眠る歴史の数々に思いを馳せる。

Battle of Barnet (バーネットの戦い)

地下鉄 Northern Line の最終駅 High Barnet で電車を降り、急な坂道を登り切った所で右に曲がると High Street がある。通りに沿った両側は、charity shop、郵便局、メガネ屋、カフェ、銀行、食料品店などが並ぶ、小さな町によく見る光景だ。High Street を通り過ぎ、町のにぎわいが消える頃、広い平な道が堂々と目の前に広がる。Great North Road である。その昔、ローマ軍が、北は York、さらには、Edinburgh の先まで進軍した折に、歩いたであろうと思われる道である。両脇に並木が植えてあるが、その辺りに溝(みぞ)が設けられ、高作り構造の道であったのでは、と、想像される。この広い道の左側が Hadley Green で右側奥が Monken Hadley と呼ばれる地域のような。いくばくもなく、Great North Road は、二つの細い道に分岐され、この分岐点の緑の芝生に、「Battle of Barnet」の記念碑が建てられている。



Battle of Barnet は、薔薇戦争中に戦われた数々の戦いのうちのひとつである。



Red Rose of Lancaster

「薔薇(バラ)戦争 (The Wars of the Roses)」という言葉は、中学か高校の歴史の教科書にも出ていた。イングランドの王位継承をめぐる、ヨーク家とランカスター家が、時折、軍を仕立てて、30年間(1455-1485)闘った戦争である。それは、331年間に渡ってイギリスを支配したプランタジネット王朝(1154-1485)の最後の30年間でもあった。



White Rose of York

Plantagenet 王、エドワード3世(1312-77, 在位 1327-77)には成長した5人の王子がいた。そのうちの三男 John of Gaunt が Lancaster 家として、四男 Edmond of Langley が York 家として分家した。いずれ起こる薔薇戦争は、分家同士の王位継承戦であった。

王位の移り変わり

エドワード3世王の死後(1377)、長男の Edward (後に、Black Prince として知られる。)は既に亡くなっていたので、その息子の Richard (1367-1400)が王位に就き King Richard II (リチャード2世、在位 1377-1399)となった。一方、ランカスター家では、父(John of Gaunt)の死後(1399)、膨大な遺産を没収された。息子の Henry が甥のリチャード2世王に挑戦し、勝利を収めた。王を退位させ、自分が King Henry IV となって王位に就いた(1399)。この後も、ランカスター家(House of Lancaster)は、Henry V と Henry VI の二人の王を続けて世に出し、三人の王が合わせて60年間強(1399-1461)イギリスを支配した。

ランカスター家最後の王となる Henry VI (ヘンリー6世)(1421-1471, 在位 1422-1461/1470-1471)は、独り子で、生後8ヶ月の若さで、イングランドとフランスの王位に就く運命であった。幼い王に代わって世の統制が出来るよう、彼の二人の叔父が摂政(せっしょう)となり、それぞれ、イギリスとフランスの政治を担当する事になった。さらに、評議院が設けられた。王は7歳の時、Westminster 寺院でイギリス王としての戴冠式を挙げ、9歳の時、パリのノートルダム寺院でフランス王としての戴冠

式を挙げた。

彼は大事に育てられ、戦わずに平和に解決することを選ぶ性格の持ち主であった。その頃のイギリスは、フランスとの100年戦争（すでに、85年間も戦われていた。）で、国民は、税金を軍資金として搾取される事に辟易（へきえき）していた。また、王は、精神病の持ち主で、時折、狂気の発作に陥り政治に関わることができなかつた。次第に治世（在位1422-1461/1470-1471）は乱れ、父のHenry V（ヘンリー5世）が、フランス王の支配するフランス領よりも広いフランス領を占領していたにもかかわらず、1453年までに、Calais 領を除くすべてのフランス領を失ってしまった。1453年の夏、ヘンリー6世の精神病は悪化し、一年半もの間、政治いっさい、何事にも関わることができなくなった。この時、ヘンリー6世のProtector（摂政せつしょう）に指名されたのがヨーク家の第三代伯爵Richard（Richard Plantagenet）である。彼の人気は高く、王位を主張して立ち上がった。これが、ヨーク家とランカスター一家の薔薇戦争の始まりである。

1455年、最初の戦いがSt. Albansであった。ヨーク軍が勝ち、ヘンリー6世は捕えられた。この後、Battle of Blore Heath（1459）でヨーク軍、Battle of Ludford Bridge（1459）でランカスター軍、Battle of Northampton（1460）でヨーク軍が勝利した。1460年12月のBattle of Wakefield（ウエイクフィールドの戦い）では、ヨーク軍が負け、指揮者のRichardは殺された。ヨークの指揮はRichardの長男エドワードに移り、1461年にBattle of Mortimer's CrossとBattle of Towtonにて大勝利を収めた。エドワードはHenry 6世を退位させ、King Edward IV（エドワード4世）として即位（最初の在位1461-1470）した。



White Rose of York

その後、ランカスター家派のウオーリック侯がヘンリー6世の実弟と組んでヨーク家の王エドワード4世を国外に追放。Henry VI（ヘンリー6世）が、再度、王位に就いた（在位1470-1471）。

国外に追放されたエドワード4世は、一文無し（いちもんなし）でオランダ北部に上陸。Brugesの有力者の援助でFlandersにたどり、Low Countries（ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ）一帯を統治していた有力なBurgundy伯爵（彼の姉の主人に当たる）に会い、お金と船を仕立ててもらい、再度、イギリスに戻る（1471、3月）。

「バーネットの戦い」は、1471年4月14日Easter Sundayに、ロンドンの北部Barnet、現在のHadley Green/Monken Hadleyで戦われた。ヨーク軍を指揮したのは、流刑から戻ったばかりのEdward IV（エドワード4世 当時28歳）。ランカスター軍を率いたのはRichard Neville（リチャード・ネヴィル 第16代ウオーリック侯）であった。前夜、両軍とも、闇の中、北からランカスター軍、南はロンドンからヨーク軍が侵攻し、小高い丘の上に陣を張った。戦いに先立つ前夜、ランカスター軍はヨーク軍に向けて多数の大砲を撃ち放った。しかし、ヨーク軍は予定よりもランカスター軍に近い位置に陣を取っていたので、大砲の弾（たま）はヨーク軍の頭上を越えて飛び落ち、ヨーク兵への被害は最小だった。戦い当日の朝は、濃い霧が立ち込め、視界は2メートル弱。ヨーク軍のランカスター軍への左側面（ひだりそくめん）攻撃が、ランカスター軍の陣地を丸く右に移動させた。いったん、勝利の内に、ロンドンに向けて逃散するヨーク兵を追ったランカスター兵が、戦場に戻って再び戦いに参加した時、ヨーク軍の位置と思われる所でランカスター軍が戦っており、霧の中、赤薔薇・白薔薇のバッジがハッキリ見えず、ランカスター軍は味方を背後から切り殺す事態となった。「裏切り者！」と言う叫びが上がり、ランカスター軍は闘志を砕かれ、北に逃散。最終的に、指揮者のウオーリック侯（Richard Neville）が逃げ切れずその場で刺し殺され、戦いは終わった。この戦いは朝の4時頃始まり8時頃には終わった。ランカスター軍はヨーク軍の2倍の死者を出したと伝えられている。この朝の「濃い霧」は、蒙古軍（元寇）の日本上陸を阻止した「神風」の如く、ヨーク軍に有利に働いた。

Battle of Barnetで勝利を得たヨーク家（House of York）のエドワードは、King Edward IV（エドワード4世）として王位に復帰し、同年のBattle of Tewkesburyでも勝利を得、この後の彼の在位期間十数年（1471-1483）は世の中は平和であった。彼の死後（1483）、彼の息子のエドワードは、父親の結婚相手の女王（彼の母親）は、「王が秘密時に結婚した女性で、評議院で正当世が認められてい

ない」と言う理由で、王位継承の正当性が認められなかった。これにより、ヨーク家から王位に就いたのは、エドワード4世王の弟に当たる Richard で、King Richard III (リチャード3世、在位1483-1485) となった。

一方、ランカスター家では、Towton の戦い (1461) で破れ、Henry VI はスコットランドに逃亡の後、ロンドン塔に幽閉された。その後、短期間 (1470-1471) 王位を取り戻すが、バーネットの戦いとチュウクスベリー の戦いでランカスター軍が敗れると、王も間もなくロンドン塔で死んだ (1471)。殺害されたと言う説もある。ランカスター家最後の王であった。



Red Rose of Lancaster

この後、1485年、Henry Tudor (ヘンリー・チューダー) が「自分は、ランカスター家のヘンリー六世の甥に当たる。」と、王権を主張し、地元 Wales にて旗揚げをし、北上し、Battle of Bosworth でヨーク軍を破った。ヨーク軍の指揮者 King Richard III は戦場にて殺された。ヨーク家も最後の王を失った。

薔薇戦争の終結 (1485)。薔薇戦争の終結は、フランスのロワール (Loire Valley) に起源する、プランタジネット王朝 (House of Plantagenet) の 331 年間 (1154-1485) に渡るイギリス支配の終結でもあった。

Henry Tudor とは？

彼の祖父、Owen Tudor は、ランカスター家の King Henry V に仕えていた。王が亡くなると、女王 Catherine of Valois はすぐに Owen Tudor と再婚。息子の Edmond Tudor が生まれる。Edmond Tudor の息子が Henry Tudor である。

補足：「House of Tudor」(チューダー王朝) について

薔薇戦争最後のボズワースの戦いでヨーク家を倒した Henry Tudor は、母親を通してランカスター家の系列である。彼は、King Henry VII (ヘンリー7世) として 1485年王位に就くと、ヨーク家のエドワード4世の娘 Elizabeth York を女王に迎える。その結果、チューダー家は、ランカスター家とヨーク家の両家を統合した王朝となる。基盤を Wales の Pembrokeshire に置く、新しいイギリス王朝の誕生である。めでたし！めでたし！！



Tudor Rose

ちなみに、Henry VII と Elizabeth York の間に生まれた次男が、世継ぎ欲しさに、次々と6人の女性と結婚した、悪名高い Henry VIII (ヘンリー8世) である。

後記：

イギリス王室の歴史は込み入っている。特に、中世には、西ヨーロッパ大陸、特に、フランスとの権力争いがひどく、各地の豪族、貴族、皇族が同盟を結んで権力争いに明け暮れ、女性は、政略結婚で争いに巻き込まれ、その系図は「芋づる」のようである。私には、到底、すべての芋づるをたどって歴史を解明するのは不可能であった。この原稿も、つながる根を所々ぶつ切れにせざるを得なかった。

宇宙と愛

ネット文化サロン

飯塚忠治のメールより

こんにちは

夏は去り、秋が、もう今から来年の春を思い浮かべて冬を乗り切るつもりです。

お元気のことと存じます。

この間のサロンで、宇宙の事をというお話がありました。

下記のようなものを書いてみました。読むに堪える文章であるか甚だ自信がありませんが、これが私です、宜しくお願いします。



宇宙のこと、たまに YouTube のプログラムで見ることがあります。宇宙物理学としての宇宙そして地球物理学、特にプレートテクトニクスのこと大いに興味はあります。

一年ほど前に読んだ本で、宇宙の年齢は約140億年とあり、どうしてその年齢を割り出せたかという事が書いてありました。

確か現在の宇宙の膨張速度を宇宙の収縮という観点で計算すると、宇宙が芥子粒くらいに収縮するのにそのくらいの時間がかかるというような記述でした。この記述を読んだとき、その疑問の震が取り払われた爽快感に快哉を叫んで自分がいました。

申し上げたことがあるのかもしれませんが、もし私にそれほどの能力があったのなら、宇宙を研究する仕事についていたと思います。大学も物理学科に一年学んだという事で私の宇宙物理に対する興味のほどご理解いただけるとと思います。しかしながら新潟の田舎育ちで、勉強もろくにしないで野原を駆け巡って遊び呆けていた私には、大学での数学の高いレベルは特に見上げるほどの壁の高さで、太刀打ちできなかった、という現実がありました。小さい時の勉強と遊びのいいバランスは社会で、何かを成すにはこの反省から大事だと今は思います。でも野山を駆け巡った少年時代のことはかけがえのない人生の宝とも感じていて、この事で後悔という事は全くありません。

中学2年生または3年生の事でしたが、学校所有の畑に学校の実習で野菜つくりの為、その畑に行く道中で登り坂を歩いている時、ふっと見上げた杉木立の間からは抜けるような青空が見えました。

本当に何気なくあの青空の先には何があるのだろうか？と思ったのが初めて、その先は、そしてその先は、さらにその先は、先、先、、、と考えた瞬間、私は発狂するのではないかというほど心が混乱したのを今でもある種の恐怖感が心の奥底に眠っています。

私は25年くらい前に離婚して、長い事一人で、ハートフォードシャーの在る村のフラットに住んでいました。今も同じ村に住んでいますがこの村内で引っ越しをしています。

この村の駅から当初の私のフラットまでは緩い坂道を7分くらい歩いた距離です。フラットの手前に林がありこの距離約70メートル、特に冬の冴えた夜、木々の木立から見える夜空を仰ぎ見ながら仕事からの帰り道を歩いたものです。

路半ば見上げる空は稍星

この道すがら詠った私の人生で本当に最初の俳句？です。

離婚を経験し、人生をさ迷った時期でもあり、生きること、人生の意味、、様々な事柄が私の心の中で渦巻いていた時期でもありました。宇宙は物理の法則の中で動き、無機質な存在、だけれどある夜の帰宅途中の坂道で見上げた稍星を見ながらふっと心に浮かんだことがありました。

「生きるというのは、愛と宇宙」、だと。

愛を感じられている時には、それが宇宙のすべてとなるからです。こう思えるようになってから生きることの喜びを強く感じられるようになってきました。

私は宇宙と生命の関わりここにあると心の中で思えるようになりました。

追記ですが、宇宙に携わる人々は宇宙から、例えば月に降り立った自分を客体化して一つの天体である地球を眺めることが出来るのではないかと常に思っています。まだ誰にもこの質問をする機会はありませんが、、、。



小川のり子のメールより

宇宙は無量大ですか？

太陽や地球なら球形の天体であると言えますが、宇宙となると、一体どんな形をしているのか、そして宇宙の果てなどあるのかと、まるで小学生のような疑問が湧き起ってきました。前述の飯塚さんが読まれた本では宇宙の年齢は約140億歳だそうです。私の読んだのからもう少し付け加えますと、約140億年前のビッグ・バンによって宇宙は誕生し、その中に我々の銀河系が創造され、太陽を中心とした太陽系が生まれました。宇宙空間の星間ガスとチリが凝縮して地球と呼ばれる天体が誕生したのは約46億年前だそうです。

宇宙の年齢推定には、その膨張速度を収縮という観点で計算云々と飯塚さんは書かれていますのと、そしてなぜ大爆発が起きたかを理解するのは、小学生並みの私の知識ではとても無理です。我々が住む地球はガスとチリが固まって出来たとあるのも不思議です。が、日本では昔から、「ちりも積もれば山となる」と言う諺がありますので、なるほど、山が積もれば地球になるかと、納得することにしました。

約30数億年前、地球に最初の生命と言われるものが誕生したそうです。おそらく最初はアメーバーのような生物であったのが、人間に進化するまでには、またまた気が遠くなるような時間がかかったようです。天体や人間の生成過程を追うのはここまでで、今日はその地球に棲む一生物が、そこから毎夜眺めることが出来る一つの球体について、何か書いてみようかと考えています。雄大なスケールの「宇宙と愛」をグーッと縮めて、宇宙のごく一部であるお月さん、「月を愛でる」で始めたいと思っています。

稜線を染めながら昇る朝日、地平線のかなたに沈む夕日、夜空に輝く満天の星とそれぞれに趣はありますが、何と言っても月への想い入れは、特に日本人にとっては非常に深いものであるような気がします。百人一首の歌かるたの箱を開けますと、次々と月に想いを馳せる歌が飛び出してきました。その多くが寂寥感にあふれ切ない思いにさせる歌で、少々女々しい気もするのですが、日本人の感性からして、月は女性形とを感じる人が多かったのかもしれない。

天の原 ぶりさけみれば春日なる みかさの山に い出し月かも	安部仲麿
ほととぎす 鳴くつる方を眺むれば ただ有明の月ぞのこれる	御徳大寺左大臣
月見れば 千々に物こそかなしけれ わが身にひとつの 秋にあらねど	大江千里
めぐりあひて みしやそれともわかぬ間に 雲隠れにし夜半の月かな	紫式部



ちなみにイタリア語では月は女性詞、太陽は男性詞で、ドイツ語では月は男性詞、太陽は女性詞だそうです。日本の神話では月読尊（つきよみのみこと）と言う男の神様が登場しますが、太陽神である天照大神（あまてらすのおおみかみ）は彼のお姉さんです。感性の変化と言えは大袈裟ですが、平安時代になると、月を詠んだ和歌には女性の繊細な情緒が好まれ、腹立ちまぎれに岩戸に身を隠し、この世を暗闇にしてしまうような激しい気性の詠み人の歌は見られないようです。

日本の古代は母系社会だったからでしょう、太陽のように力強い女神が現れたようです。以来、約2千年後の現代21世紀ではどうなっているのでしょうか。岩戸に隠れて意地悪するどころではなく、女性たちはまだまだ“#Me

Too”運動などをしなければならない世の中になっています。これは日本だけの問題ではありませんが、政治の世界にも男女平等が実現出来れば、世の中がもう少し平和になるのではないかと思えてなりません。いま、世界の各地で繰り広げられている紛争の一つ一つを取り上げてみれば、プーチン、ネタニヤフ、アサド(過去)、習近平、金正恩などの顔が次々と浮かび上がってきます。少々短絡的な意見ですが、もし、Kamala Harris、Claudia Sheinbaum、Kemi Badenoch、小池百合子、その他の女性リーダーならどうしただろうかと、つい考えてしまいました。

いつの間にか月の世界から飛び出してしまいましたので、軌道修正、月に戻りましょう。さて、月への名称も、望月(満月)、十六夜の月(満月の翌日)、立ち待ちの月、居待ちの月、寝待ち月などと色々あります。前述のほととぎすの歌に、有明の月が出てきますが、これは明け方の薄墨色(うすずみ色)の空にうっすらと残る月のことで、残月と呼ばせず有明の月と呼ばすなんて・・・日本語の語彙の豊富さを堪能させてくれるようです。その他、“月を渡る”、“月の雫”、“月鏡”、“月の涙”、“雲心月”などと月に結び付けて比喩的に表現する、時間の経過や露などを意味する言葉がたくさんあります。これらの“言葉の宝物”が次第に失われて行くのは残念な気がしますが、これも時の流れなのでしょうか。

ここまで書いて、突然、菜の花や 月は東に 日は西 が浮かんできました。これは与謝蕪村の句ですが、時代と共に月に対する表現の仕方も変わって来たようです。勿論、31文字と17文字の違いはありますが、俳句には自分の思いをあれこれと言うよりも、自然の風物をさらりと読み込み、自分の思いは言外にほめめかす・・・の作風が多いようです。



芭蕉の句、名月や 池をめぐりて 夜もすがら、そして蕪村の寒月や 門なき寺の 天高し などは特別な景色や状況を詠んでいる句だとは思えません。しかし、花鳥風月に対する深い想い入れ、大袈裟に言えばそのDNAを引き継いだ私達日本人には、短い言葉で表される以上の何かをその内部に秘めて、句を詠み、また読み手もそれを感じ取ることが出来るのではないかと、私は思っています。

三日月の にほやかにして 情けあり
月の名を いざよひと呼びて なほ白し
稜線を 刻々と鎮め 月のぼる

高濱虚子
竹下しずの女
横山白虹

上記の句について、美人の眉のような細い月を想えば・・・、何となくためらいがちに白々と上る月を想えば・・・、そして、皓々と照り映えしつつ山の端に上る月を想えば・・・それらの情景が目前に現れてくるようにおもえます。勿論その解釈が、作者の意図と違う場合もあり得ることでしょう。特に最近、俳句を詠む外国人が増えて来たようですが、異文化の人々がどのような想い入れを月に抱いているのか、知ってみたい気がします。

月と言えば自然に唇に上ってくる歌があります。「荒城の月」や「月の砂漠」は何となく物悲しい歌ですが、「十五夜お月さん」や「雨降りお月さん」は子供の頃元気よく歌ったものです。そういえば昔、歌謡曲で、「月がとっても青いので遠回りして帰ろう・・・」なんて歌が流行ったように記憶しています。私は青い月とは、「once in a blue moon」のイギリスで耳にする慣用表現、珍しいを連想して、月もまれには青くなるのかと勘違いしていました。今でも、夜空にひっそりとかかる青色の月を想像すれば、何となくロマンが感じられるような気がしないでもありません。月への想いはまだまだありますが、それはまたの機会にし、今日はこの辺で月より地球に戻りたいと思います。

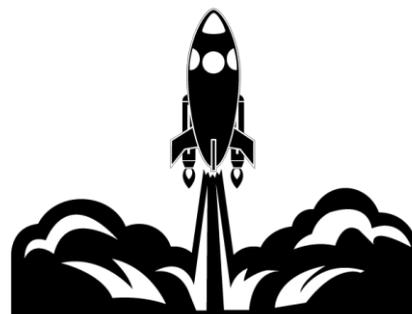


加藤節雄のメールより

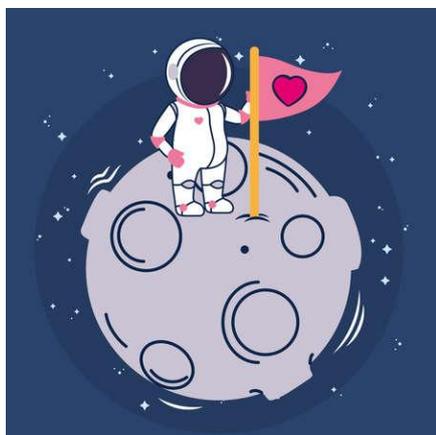
しばらくぶりにネット文化サロンに投稿します。

トランプ大統領の就任演説をテレビで見た。特に目新しいことはなく、自説の「Make America Great Again」を繰り返すだけだった。施政方針では、メキシコからの移民対策、関税、パナマ運河等々、相変わらずアメリカ一國主義を貫く姿勢を通し、COPやWHOからの離脱等、国際協調から遠ざかる態度を強調した。概ね予想されたことだが、改めて世界の先行きが混とんとするような印象を持った。

世界は現在岐路に立っている。ロシアのウクライナ侵攻、一時停戦はしたものの、イスラエルによるパレスチナ人大量殺戮、中国の台頭による世界経済の混乱、気候変動による気温上昇や洪水、山火事といった異常気象が世界中で起こり、CO2 減少のため化石燃料の削減は叫ばれている。そんな際に、もっと石炭や石油を掘れ、風力発電やソーラーパネルはいらないと主張し、電気自動車は必要ないと豪語するアメリカの大統領は、困ったことに世界第1の経済大国の首長であり、強いアメリカを強調し、グリーンランド、カナダへの領土獲得も目指している。



プーチン大統領のウクライナへの侵攻、イスラエルのパレスチナ領土占領といった軍事力による領土獲得、中国による東シナ海戦略や台湾への侵攻の可能性、世界は第3次世界大戦の一步手前まで来ている状況である。世界はアメリカが平和を尊び、民主主義を守ることを期待している。そのアメリカが自国の安寧と繁栄のみを追求し、他国との協調を避けるようになっては、地球の未来はあまり明るくない。



昨年のことになるが、英国の新聞で宇宙飛行士のインタビュー記事を読んだことがある。宇宙から見た地球は青くとてもきれいだ。でも、宇宙という規模で考えたら地球はほんの小さい星の一つに過ぎない。そんな小さな地球に中で人がいがみ合い、戦い、殺しあうのは何と馬鹿らしいことだろう。飯塚さんの宇宙観にも匹敵すると思います。愛と宇宙、素晴らしい言葉です。自分が愛されている、自分は誰かを愛しているという感覚は生きていることへの存在感となり、自分が生きている地域、国、地球、強いては宇宙観につながるのでしょう。

宇宙飛行士の記事を読んだときに、私は即座にプーチン、シー・ジーピン、キム・ジョンウンといったディクテーターをまとめて宇宙に送り込み、青い美しい地球を見せて、争いをせずこの美しい地球を守ることを誓わせたいと思った。今回はこのリストにドナルド・トランプも加えたい。



うちのふうちゃん～お知らせ&Puppy編

ミルロイ美紀

お知らせです

前号で初登場した
ふうちゃんですが、
昨年末に虹の橋を渡って
天国へ旅立ちました

11歳11ヶ月、
ジャーマンシェパードとしては、
しっかり長く生きたと
獣医さんには言われました



12年弱は
短く感じますが

ふうちゃんの残してくれた
思い出がたくさん
あります

イタズラの
数々も、
今となっては
楽しい思い出
です



なのでこれからも
ふうちゃんの

思い出話に
お付き合い
いただければ幸いです

今日は
ふうちゃんが我が家に

やってきた時の
お話です



ふうちゃんの生家は
プリストルの
ブリーダーさんのお宅です





※子犬を選ぶ際には、母犬の気質や健康状態を見ることが重要です





英国春秋俳壇

エリオットつや子

みかん

小春日の香箱猫はもっこりと

シクラメン色どりそろえ慰むる

クリスマスツリーに猫はじゃれかかり

冬至よりわらの節ほど日が長く

ブロッコリー蕾のままに刈り取られ

マスクする人の目凝らし話聞く

針に糸通せず指はかじかめり

パリの冬硬くひびくや石畳

みかんむく指先につくみかんの香

早水仙ひとかたまりの暖かさ

彼岸について

石井建心

晴れの日が増え、日照時間が長くなり、春の訪れを感じる季節となりました。2025年の春分の日は3月20日です。春分・秋分の日は昼夜の長さが等しくなる日であり、昔から「暑さ寒さも彼岸まで」と言われるように、厳しい季節の終わりを告げる節目の日です。

昨年の秋、BBCの「サンデー・モーニング・ライブ」という番組の中で日本のお彼岸が取り上げられ、お彼岸の習慣についてインタビューを受けました。日本を離れて久しい方、また日本人の血を引きながらも英国で育った方もおられるかと思しますので、今回はこの場をお借りして、お彼岸についてお話ししたいと思います。



彼岸とは？

「彼岸」とは、煩惱（欲望）を離れた世界、つまり人間の迷いや苦しみの元となる煩惱から解放された世界、すなわち浄土を指します。「彼岸」という言葉の語源は、サンスクリット語の「パーラム」で、「悟りの世界」を意味する語に由来し、漢訳では「到彼岸（とうひがん）」と訳され、「彼の岸に到る」という意味を持ちます。苦しみの世界（此岸：しがん）を離れ、悟りの世界（彼岸）に至るためには、佛道を実践する期間が必要とされます。この修行を行う期間が「彼岸」の期間であり、春と秋、それぞれ7日間と定められています。その中心の日に春分の日または秋分の日が含まれます。

日本には「暑さ寒さも彼岸まで」ということわざがあり、また、浄土真宗本願寺の第八世蓮如上人は、「昼夜長短なく、寒暑もなし（中略）この時をもって佛道を修すべし」と述べておられます。この彼岸の時期には、普段佛道を実践していない人々も、西に沈む夕日に向かって手を合わせる言われています。これは、浄土が西方にあると信じられているためです。また、一般的に、日本では「彼岸」に敬意を込めて「お彼岸」と呼びます。

お彼岸には何をするの？

お彼岸は佛教において重要な意味を持ちますが、現代では春分・秋分の日先祖の墓参りをし、供養を行う習慣として定着しています。この風習は日本独自のものであり、その起源は飛鳥時代の聖徳太子の時代にまでさかのぼるとされています。平安時代には宮中の年中行事となり、『源氏物語』や『蜻蛉日記』にも記録されています。庶民の間で墓参りの習慣が広まったのは江戸時代中期頃からと考えられており、お彼岸には多くの人々が墓を訪れ、花や線香を供え、手を合わせて先祖に感謝の気持ちを表します。また、伝統的に佛教徒にとってお彼岸の期間は単なる先祖供養の時期ではなく、「六波羅蜜（ろくはらみつ）」を実践する期間でもあります。

六波羅蜜って何？

「波羅蜜（はらみつ、パーラミター）」とは、「完成する」「成就する」という意味であり、煩惱や苦しから解放され、悟りの境地に至ることを指し、六波羅蜜は、悟りを開き、彼岸に至るために実践すべき6つの修行のことを指します。

1. 布施波羅蜜（ふせはらみつ）（Dāna ダーナ）
 - 見返りを求めず、他者のために施しをすること。
2. 持戒波羅蜜（じかいはらみつ）（Śīla シーラ）
 - 他者を傷つけないように、道徳や戒律を守り、慎み深く行動すること。
3. 忍辱波羅蜜（にんにくはらみつ）（Kṣānti クシャーンティ）
 - 侮辱を受けても耐え忍び、不運に遭遇しても受け入れること。
4. 精進波羅蜜（しょうじんはらみつ）（Vīrya ヴィーリヤ）



- 自他の幸福を願い、誠実に努力し続けること。
- 5. 禅定波羅蜜（ぜんじょうはらみつ）（Dhyāna ディヤーナ）
 - 冷静に自分を見つめ、反省し、心を安定させること。
- 6. 智慧波羅蜜（ちえはらみつ）（Prajñā プラジュニャー）
 - 他の五つの波羅蜜を實踐し、真理を悟り、物事の本質を見極めること。自己中心の考えを離れ、怒りや不平不満に支配されることなく智慧を得ること。

お彼岸の期間が7日間あるのは、この六波羅蜜を一日ごとに実践し、7日間の中日（春分・秋分の日）に先祖供養を行うためとされています。



「彼岸会（ひがんえ）」の「会（え）」は「佛教の集まり」を意味し、「彼岸会」とは、春分・秋分の日寺院で行われる佛教の法要を指します。

また、日本では伝統的に、春のお彼岸には「ぼたもち」を、秋のお彼岸には「おはぎ」を作り、ご先祖にお供えする風習があります。そこには、ご先祖に対する感謝と敬いの心が込められているのでしょう。

「命を賜っただけでもご恩、育てていただいたのは過分なご恩」という言葉を時々耳にします。私たちは、誰しもが多くの人々に支えられて生きています。その事実気づき、自らの欲望を満たすことばかりを考えるのではなく、少しでも人のために生きることを意識する、そうした思いで、これからの毎日を大切に過ごしていきたいと、お彼岸のたびに自然と感じさせられます。

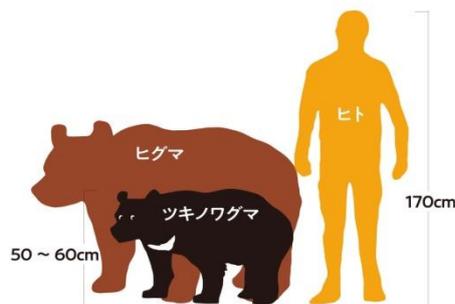


野生動物と人との共存を考える

ビドル 恵

北海道の森林でカラスを見たら、その動きに注意した方がよい。カラスが何かに注目しながら枝から枝へピョンピョンと移動しているけれど、けっして遠くへ飛んで行かない時は、近くにエゾヒグマの居る可能性が高い。熊は鹿などの大きな獲物を食べ残した時、後でまた食べる為に土や木の枝を被せて隠すので、そのおこぼれを狙ったカラスが熊の立ち去るのを待っているのだ。

春の山菜取りは、冬眠から覚めた母子熊が食物を探し回る時期と重なるので、気の立っている母熊とぼったり遭遇(毎年、犠牲者が出ている)しない為に「カラスが妙な動きをしているな～」と思ったら、来た道をいち早く戻るのが賢明だ。しかし、下を向いて山菜取りに夢中になっていたら、カラスなんぞを見上げる余



裕は無いかな？

『山の神様、エゾヒグマ』

ヒグマ(熊)は、ホッキョクグマ(白熊)と並んでクマ科では最大級、ユーラシア大陸から北アメリカ大陸と、現存する熊の中で最も生息地域も広い。エゾヒグマはその亜種でやや小型、北海道の道央や道東の森林/原野に多く生息する。小型と書いたが、本州に生息するツキノワグマの体高が50～60cmなのに対し、エゾヒグマは80～120cmと遥かに大きい。体長は雄が190～230cm、体重は150～400kg(人に飼育された雄で最大520kgに達した個体もある)。雌はやや小さくて体長160～180cm、体重120～200kg。雑食生でドングリなどの木の实や果実、草、昆虫、蛙、鮭や鱒、エゾシカなどを捕食し、打ち上げられた鯨やアザラシの腐肉も食べる。毛色は褐色から黒色で、色味の混じり具合によって金毛、銀毛などと呼ばれる。活動は春から初冬迄で、晩秋には鮭を大量に摂取して体に脂肪を貯め、木の根元の空洞を利用した巣穴で、翌春まで冬眠/冬籠りを(雌はこの時期に出産/育児を)する。



エゾヒグマはアイヌ語でキムンカムイ(山の神)。熊猟はとても危険で、時には仲間や犬を失う事さえあったから、狩猟で得られる獲物の中でも最高位として扱い、仕留めたその場で“カムイポフニレ”という儀式を行って神に感謝した。又、春先の猟で母熊を仕留めた時に授かった仔熊は、殺さずに集落に連れて帰り、『神様から養育を任された名誉ある仕事』として、養母を付けて大切に育てたそうだ。そうして1～2年ほど飼育した後に、その魂をカムイ・モシリ(神々の国)へ送り返す、“イオマンテ(熊送り)”という盛大な儀礼を行った。これは『動物の姿で人間の世界にやって来た、神様を大切にもてなした後に、見送りの宴を行なって、神々の世界にお帰り頂く』という主旨のもので、熊の再訪と狩猟の成功(食糧の安定供給)を願う、アイヌ民族にとって最も大切な神事/祭であった。

イオマンテの儀礼は何日も続くので、此处ではかいつまんで説明すると、先ず、広場の一角に“ヌサ”と呼ばれる祭壇を設置して、木の皮を薄く剥いで作った“イナウ(幣)”で装飾を施す。広場の中央に杭を打ち込み、養母に付き添われた若熊が引き出されて繫がれる。女達の唄う“ウポポ(手拍子に合わせたテンポの早い歌)”に併せて、男達が“花矢(先が丸くて刺さらない)”を射掛ける～という狩を模した儀式が始まる。歌が最高潮に達すると、若熊の四肢を縛って2本の太い“イヌンパニ(丸太)”の間に首を固定し、その両端に男達が一気に乗って絶命させる。若熊の頭部が祭壇に祀られ、酒や贈り物、歌や踊りが供えられた後に、やっと人々にも御馳走が振る舞われて、集落を挙げた大饗宴が始まるのだ。



明治以降は、和人との同化政策による生活環境の変化で、このような儀式が行われる事は少なくなって居たし、1955年には「野蛮で残酷な儀式だ」という理由で、北海道庁から禁止令が出された為に、現在は形式のみが受け継がれている。阿寒湖畔のアイヌコタンでは、毎年10～11月頃に盛大な“イオマンテの火祭り”が行われるが、これはアイヌ民族の音楽や舞踏を楽しむもので、本来の主旨とは異なっている。

エゾヒグマは好奇心が旺盛で学習能力も高く、覚えた事を繰り返して行い、警戒心も強い。孤高を好む為に山菜取りの人が襲われたり、人里近くに現れて農作物を食い荒らしたりするので、北海道では危険生物に定められている。しかし一番困るのは、エゾヒグマを一目見ようとやって来る、観光客のマナーの悪さだ。

エゾヒグマが餌を求めて出没する、晩秋の道央や道東(特に知床付近)では、訪れた観光客の車が国道

に列を成し、写真を撮ろうと路上に車を止める為に(サファリパークか!?)交通渋滞を引き起こす。パトロール団員の必死の呼びかけにも聞く耳持たず、窓やドアを開けて餌を投げ与えたり、時には車から降りて熊に近付き、三脚を構える愚か者も居る。

特に海外のメディアは鳥獣保護区にも関わらず、許可無しに勝手に山に立ち入ったりするので、もはや『熊の追い払い』による安全対策は限界で、人の方がどんどん熊との距離を詰めているのが現状だ。其の為、エゾヒグマの人間に対する警戒心は薄れる一方だし、人間の食べ物の味を覚えてしまって、人里に出没する個体も増えて来た。そのような熊は大変危険なので駆除しなくてはならず、エゾヒグマと距離を保って共存したい北海道民を悩ませている。



『大地の獲物、エゾシカ』

エゾシカは、本土に生息するニホンジカより大型で(体長 140~190cm、体重 70~150kg)、ニホンジカが一年中を通して粗、同じ毛色なのに対し、エゾシカは夏と冬で毛色が変わる。夏毛は全体が明るい茶色に白い斑点が入り、雄はベルベット状の表皮に包まれた袋角が生える。雌雄共に晩秋/初冬に全体が灰褐色の冬毛に生え替わり(尾の内側と臀部の白色を除く)、体重も寒冷地に適応して最大になる。



一夫多妻制で一年中ハーレムを形成しているが、10~11月の繁殖期を迎える頃に雄の袋角は柔らかい表皮が剥がれ、硬い石灰質の枝分かれした立派な角になる。そして、ハーレムの所有権をかけた雄同士の縄張り争いが始まり、これに勝ち抜いた大きくて強い個体のみが交尾できるのだ。植物食性で主に低地から山地の森林、又は草原や牧草地の林縁に生息し、牧草、木の実や芽、果実などを食べる。厳寒の真冬になると比較的雪の少ない越冬地(道東やオホーツク海側の平野)へ移動し、笹や樹皮を食べて飢えを凌ぐ。春先になって雌が出産のシーズンを迎える頃には雄の角が落ちる。



狩猟民族のアイヌ人にとって、エゾシカの肉は食用、角は狩猟の槍や農工具、毛皮は防寒着、内臓は薬、膀胱は液体を入れる袋に乾燥加工と、捨てる場所のない生活必需品だったから、単にユク(獲物)と呼んでいた。開拓が始まる前の蝦夷(エゾ)は原生林に覆われ、山野に溢れる程のエゾシカが生息していたようで、幕末の頃に幾度も此処に調査に入り、維新後に蝦夷を“北海道”と改名するきっかけを作った、松浦武四郎の『蝦夷日誌』の中には、一面に広がるエゾシカの大群に驚愕した旨が記載されている(彼はアイヌ人の案内で、蝦夷地を隈なく歩き周って地図を作成し、地名や古い言い伝えを細かく記録した)。

ところが明治の開拓と共に、肉や毛皮を欧米に輸出する目的で始まった大量捕獲や、開墾による生息地域の破壊、豪雪などでエゾシカは絶滅寸前に陥り、1890年頃からやっと禁猟処置が取られたものの、日高や大雪、阿寒山系に僅かに生き残るだけとなってしまった。このエゾシカ絶滅危惧の時に、食糧不足で餓死するアイヌ人が続出した為に、彼等は従来の狩猟/採集生活から、和人との同化政策に従った農耕生活に転向せざるを得なくなったのである。



その後、エゾシカの個体数は徐々に回復して行き、1957年には植林保護の為にエゾシカの頭数制限が

必要となって、先ず雄鹿の狩猟が解禁された。私の父が営林署の狩猟許可を得て、“鹿笛”で雄を誘い出す狩りを始めたのがこの頃である。雄鹿の頭部や皮は剥製/毛皮商に引き取られ、肉は脂身の少ない赤肉で美味だったから、家族で食べきれない時は知人にもお裾分けしたものだ。1994年には遂に雌鹿も解禁となったが、ハンター自体の数が減った事もあって、エゾシカの個体数は増加する一方。初冬の知床原野で越冬地を目指して大移動する、2,000頭を超える巨大ハーレムも目撃されているようだ。



2010年の調査では、エゾシカの生息数が戦後最大の65万頭を超えるると推定された。これは北海道の原生林を復活させる目的で、トドマツの植林地が増えた事と、酪農地(牧草地)の拡大などの人工的な自然環境が、エゾシカを飼育している状況となっている為である。個体数の爆発的増加に伴い、農林業被害は元より、交通事故(大きなエゾシカとの衝突は人の死亡事故につながる)や、鉄道事故(鹿が鉄道を舐めに線路上に群れるので、列車の運行が妨害される)が増え、森林や高山植物などの生態系まで破壊されつつあり、エゾシカはもはや北海道の経済と自然を脅かす、社会問題となっている。

一方では、このエゾシカを資源として利用する取り組みも活発化していて、高タンパクで低脂肪、且つ美味しい鹿肉(もみじ)を提供する店も増えて来ている。道央や道東の“道の駅”では、名物エゾシカのジンギスカン(焼くだけの味付き真空パック詰)を始め、カレー(レトルトパック)やソーセージ、ジャーキーなども売られているので、近くに行かれた時は是非お試しください。

『雪原の赤い狩人、キタキツネ』

北海道を代表する動物と言え、エゾヒグマと並んで有名なのが“キタキツネ(Sakhalin red fox)”だ。北半球に広く分布する赤キツネの亜種で、北海道とサハリン(樺太)、千島列島に生息し、ホンドキツネよりやや大きい。体長62~78cm、尾の長さ38~40cm、被毛は下顎から腹側、尾の先端、耳の内側が白色で、それ以外は全体が赤褐色、耳の後側と四肢の足首部分が黒い。生息地域は平地から高山地帯迄かなり広く、小さな哺乳類(エゾヤチネズミ)や鳥類、昆虫を主食とし、秋には果実や木の実も食べる。人里近くに棲む個体は鶏などの家畜を襲ったり、犬/猫の餌や廃棄物を漁ったりもする。



キタキツネはアイヌ語で、チロンヌプ(狩をする獣)又はフレップ(赤い獣)と呼ばれ、草原を駆ける姿や、雪の下に潜むネズミの音を聞きつけて耳を傾け、鼻から雪にダイビングする姿は、赤い被毛が燃える様に美しくて印象的だ。晩冬になるとツガイを形成する為に、雄同士の縄張り争いが始まり、流水に乗って遥々サハリン(樺太)からやって来る個体もいる。ツガイの相手が見つかり、野ネズミの棲む草原の縁や土手に穴を掘って巣を作り、早春に出産する。哺乳類の中では珍しく雄も子育てを手伝い、秋の終わり頃に成長した子ギツネを、巣穴や縄張りの外に追い出す“子別れの儀式”をする。



此の習性を描いた映画『キタキツネ物語』が1978年に放映されて、日本中にキタキツネの一大ブームを巻き起こし、観光客が北海道に押し寄せて来るきっかけを作った。

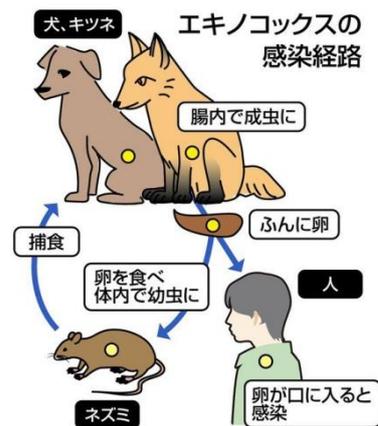
しかしキタキツネは、“エキノコックス”という寄生虫の終宿主で(主食である野ネズミから感染する)、その糞や体表面から(毛繕いする際にお尻を舐める為)

人にも寄生/感染する事が懸念されている。エキノコックスは元々日本に居た寄生虫ではなく、1924~26年の頃に、礼文島のネズミ駆除と毛皮生産の目的で、千島列島の新知(シンシル)島から移入した“青狐

(Bering Island Arctic Fox)”の中に、感染した個体が混じっていた為と考えられている。

エキノコックスは成虫でも3~4mmという節のある小さな線虫で、糞に混じって体外に排出される卵は、僅か0.03mmと肉眼では見る事も出来ない。キタキツネを触ったり、沢や川の水を直に飲んだり、山菜や野生果実の生食、或いは犬の放し飼い(犬にも寄生する)など、何れかの経路で卵が人の口に入ると、腸内で孵化した幼虫(胞状虫)は、腸壁から血流/リンパ流に乗って、主に肝臓、腎臓、肺、脳、稀に骨などに入り込み、丸い袋状の包虫嚢胞を形成して増殖を始める。

厄介なのは、治療が感染部分/嚢胞の摘出手術しか無いのに、エキノコックス幼虫の発育が人体内では非常に緩慢な為に、早期発見が難しい事だ。寄生された内臓の機能が低下して、疲労感や腹部の不快感、膨張感、痛み、黄疸や浮腫。肺や脳の場合では血痰や発熱、意識障害、痙攣発作といった自覚症状が現れるのに、数年から十数年以上も掛かるのだ。その頃には既に感染臓器の病巣が壊死を起こしており、包虫嚢胞の転移や拡散、或いは増大によって周りの内臓が圧迫され、腹水が溜まり始めると半年で死に至る~という恐ろしい寄生虫である。



その為、北海道では、野生のキタキツネに近づく事も、餌を与える事も禁止されているが、これを守



ってくれる観光客は少ない。特に観光名所や展望台の駐車場では、人間の食べ物に味をしめたキタキツネが、真昼間から路上に現れて餌をねだり、車から車へと歩き回る光景が見られる。おまけに人間の食べ物は、キタキツネにとって脂質や塩分が多過ぎ、消化不良や腎不全を引き起こすし、体力や免疫力も衰えて“疥癬”などの皮膚病(人にも感染する)に罹り易くなる上に、交通事故死する個体も多い。

『餌やり禁止』の立て看板は無視され、観光客の給餌行為が一向に止まらないので、1999年頃より駆虫剤を野生のキタキツネに摂取させて、人への感染機会を減らす対策も試みられたが、

キツネが野ネズミを食べれば元の木阿弥で、あまり効果は望めていない。現在、キタキツネのエキノコックス感染個体率は60%以上とも言われ、人の生活に適応したキタキツネが増える事で、更に急速な感染者数の増加が危惧されている。

エキノコックス症・罹患患者は毎年17~27名程度(人から人へは感染しない)だが、近年はペット連れの旅行ブームとあって、本州にも感染が広がっている。

◎キタキツネを近くで見たい時は、北見市の“北キツネ牧場”がお勧めだ。此处では駆虫が徹底された、キタキツネとエゾタヌキが放牧されており、人馴れしているので、一緒に写真を撮ったりする事も出来る。

最後に、長いこと“北海道の妖精/動物編”にお付き合い頂き、ありがとうございます。稚拙文ながら、登場して来た数々の動物達の可愛らしさ/美しさは元より、野生の動物は人間と関わり合うことで、頭数のバランスが崩れ、その生息環境に悪影響が出ているという事実を知って頂けたら幸いです。又、近年の突発的な“SARS(重症急性呼吸器症候群)”の大流行や、アフリカの“エボラ出血熱”なども、本来、野生の動物が持っていた病原菌に人が感染して起こっているし、エキノコックスに限らず野生の動物には、人の健康にとって危険な側面がある~という事を認識して欲しいと願います。

そして、“餌付け”などの過度な接触行為が如何に危険であるか、野生の動物と共存する上での、適切な行動について考える事が大切だと思います。そのような理解と工夫の中から、人と野生動物の本当の意味での共存が生まれるのではないのでしょうか。

COP3と「Kyoto」

小川のり子

昨年6月にストラットフォードのRSCで「Kyoto」と呼ばれる芝居が上演されていた。それが気候変動を扱ったドラマであり、タイトルのKyotoは1997年COP3 於京都からだったとは全く気が付かなかった。出演者のお一人、伊川さんからのお勧めで、それがロンドンの新劇場、ソーホープレイスで1月からスタートすると聞き、急いで予約し観に出かけた。

最初に驚かされたのは、席に着く前に Delegate と印刷された名札を渡され、首にかけるように言われこと。私の席は円形舞台の最前列。ドラマが始まると舞台が会議テーブルにもなり、最前列の観客たちは、即席代表者のような神妙な気持ちになりながら着席。さらに驚いたのは、本物の Delegate、俳優たちが我々のすぐ隣に来て座り、あたかも会議出席者の一員として握手を求めてきたからである。ドラマが進行すると共に、時と開催国も変わり、会議も白熱化して行くが、難航をきわめた京都議定書がやっと成立した時はほっとして、本物も偽物も一緒に立ち上がり、大きな拍手を送った。隣の席の国連代表の秘書官が握手を求めたので、私も強く握りかえした。また幕間では各国の代表者（アクター達）が客席に下りて来て観客との会話を楽しんでいたようだ。私は、中国代表者とは意見が一致して、劇中でサウジアラビア代表のCO2を減らすことに非協力的な態度をなじって、「あんな奴、蹴とばしてヤレ!」、「ええ、やっちなえ!」などと、無責任な受け答えでもって、ニセ代表者としての役割を果たした。英国代表もやって来て、昨年、京都を旅した彼の話をもっと続けたそうだったが、舞台が始まったので時間切れになってしまった。



「Kyoto」は我々の一大関心事である地球温暖化をドラマ化した傑作。主役が物語のヒーローではなくアンチヒーローで、彼は石油会社お抱えの米国弁護士であり、オイルロビイストとして登場。円形舞台の会議場は、それぞれジュネーブ、ベルリン、リオ、ニューヨーク、京都などに移動するが、登場人物は各国の代表者で同じ顔ぶれ。メルケル独環境相、プレスコット英副首相、アル・ゴア米副大統領などの実在政治家も登場する。おかげで、本物の顔を思い浮かべながら、ちょっと若過ぎ、少々痩せ過ぎ、イケメン過ぎ などと品定めに忙しく、彼らのセリフを聞き逃してしまったりもする。

舞台は1989年から1997年に至るまでの「グリーンハウスガス退治物語」。とはいえ、“光陰矢の如し”と9年間を3時間足らずの超スピードで駆けめぐって行く。各国の代表者がいかにして地球温暖化を緩和するため、排出ガスの削減に協力し、京都で画期的な数値目標付きの削減合意、いわゆる京都議定書、を成立させることが出来たかのプロセスが描かれる。が、その道のりは紆余曲折を経たうえ、まさに小田原評定も顔負けかと思われるほどの堂々巡りをしながらも、最後は議長の鮮やかな裁量で達成できるという筋。「本当にお疲れさま!」と観客も思わずほっとし、前述したように、立ち上がって拍手をもって喜びを分かち合った次第。

主役の弁護士ドン・パールマンは物語の中ほどまで、非政府団体代表として地球温暖化国際会議に参加し、サウジアラビアに代表される産油国に助言する。しかし彼らにとって不利な意見が出ると、現代は、“不一致の黄金時代”（golden age of disagreement）と高言、会議をひっかきまわしてしまうので、途中から正式代表以外は退席せよと議場から締め出されてしまう。そこで、サウジが席に置いたノキア携帯で、会議の進行状況を盗聴しながら彼らに指示を出し続ける。準主役のラウル・エストラーダはアルゼンチン出身の外交官であるが、温暖化規制会議の重要性に目覚め、自ら議長に立候補する。ベルリン国際会議では議長としてメルケル環境相と問題の核心にせまる。例えば、「温暖化に伴う海面上昇で、我々の生活脅かされる・・・」の条項を “・・・would threaten



survival”にするか、“・・・could threaten survival”の方が妥当などと、would と could の違いで一もめする。またある文言を括弧に入れるか入れないか、句点は要、読点は不要など、あれこれと意見続出で、「そんな些細な事に時間をかけるなんて、本題からそれているのでは・・・」と、我々を苦笑させ、またウンザリもさせる。こうして言葉のニュアンスの違いの議論が延々と続いていたが、科学者の温暖化データが既成事実として報告されるにつれ、数値目標に議題がシフトしていく。

今回の舞台で、私にとって初めてその存在を知った国が登場。キリバス共和国と呼ばれ、太平洋上に浮かぶ、ギルバート諸島、フェニックス諸島、そしてライン諸島の一部を領土とする国家である。このまま海面上昇が続いて行けば、2050年には国の25～80%が浸食されてしまうそうだ。彼等にとって温室効果ガス規制はまさに死活にかかわる問題。同国代表がガス排出を80%までに下げる提案に対し、主人公ドンから、「小さな島のたった人口8万人のために国際経済を完全に破壊して、6兆といわれる人々の生活を台無しにするとは本気か」と嘲笑される。また、「地球温暖化にはポジティブな面があるのでは」との中国代表の発言に、アメリカ代表が、「プールサイドで長いホリディーが楽しめる」と冗談半分で答え、キリバス代表から、「もっと真面目に考えて！」と猛烈な反撃を受けてしまったりもする。

2幕目は京都国際会議場を舞台とするが、このあたりから登場人物の個人生活が物語の展開に関わってくる。主人公ドンと妻シャーリー、息子のブラッドとの関係。バルト3国のリトアニアからロシアのポグロムから命からがらアメリカへ逃げてきたドンのユダヤ人両親。ドンが希望したスタンフォード大学が第2次大戦後ユダヤ人枠一杯だったため、ハーバード大学に入学し、ワシントンの石油会社の利益を代弁する弁護士になったこと。つまり恩人である米国社会がドンの人格を形作ったことなどが登場人物たちから語られたりする。

それと、この2幕目では聞きなれない日本語、“しちじゅうにこう”という言葉が飛び出す。羽織はかま姿の日本代表の挨拶では、日本には四季だけではなく七十二候と呼ばれる、細かく季節を表す方式がある。私たち国民は、花の中でも優雅で繊細な桜を何よりも愛でるが、年々その開花が早まってきている。そしてそれに伴い七十二候もどんどん変化してゆく。これら季節の変化が我々のせいではないと誰が言えるだろうか。だから、真剣にこの地球温暖化問題に取り組むのが、我々の使命であると、COP3会議の重要性を強調する。

少し横道にそれ、72候とは古代の中国で考案された季節を表す方式だそうで、日本の気候風土に合うように改訂されている。四季を24節句に分け、節句をさらに5日ごとの3つに分け合計72候と細分される。

例えば、24節句の1つ春分の候はと言えば、ウィキペディアでは、

初候	雀始巢	雀が巣を構えはじめる
次候	桜開始	桜の花が咲き始める
末候	雷乃発生	遠くで雷の音がし始める

と説明がある。とんでもない、5日ごとに季節の変わり目に注意

を向ける暇なんてない。とは思ったが、反面、PCもスマホもすべて忘れて、雀の巣作りを眺め、桜の蕾のふくらみを楽しみ、何処か遠くで春雷を聞く生活もたまには悪くない・・・と思い返してみたりした。



多くのドラマは虚構の世界が描かれる。「Kyoto」がどの程度フィクション性を帯びているか私にはわからない。が、各々のシーンで「あーそうだったのか」と自分なりに納得させられたのは少なくはない。COP3の主催国日本では、削減規制案の数値が国会で承認された5%を超えるため内閣不信任が出されてしまう。それを否決するため代表者自らが東京に向かうため、日本代表不在の会議となってしまふ。進行は議長のラウルだけになるが、午前0時になって同時通訳者も帰宅してしまった深夜の会議場は騒然となる。それぞれの国を代表する人たちの通訳なしの怒鳴り声が、英語、ドイツ語、中国語、アラブ語、スワヒリ語、キリバス語などで飛び交い、彼らはもとより我々観客もチンプンカンプン。言葉とは自分の意見を述べる手段とはいえ、その言語を理解する人だけと言う制約がある。もし世界共通語があれば、例えば英語など、諸問題もより早く解決されるのではないかと、大声を張り上げて自国語をまくし立てる代表者を眺めながら、つい思ってしまう。

延長しながらも意見百出で膠着状態に陥った会議で、ランチなしで続けると議長命令。餓死させるつもりかと憤慨した英代表のプレスコット。「腹が減っては戦が出来ぬ」と会議室から飛び出し、トロリー満載の食べ物と共に戻って来るシーン。昔の組合活動での経験話を語り、最後まで諦めずに話し合いを続けようと、落ち込んだ議長を励ますシーン。笑わせたり、しみりさせたりと、ドラマの構成が巧みに出来ていると感心。

そして、この各国の思惑で混乱を極めた Kyoto 会議も最後の採決にやっとたどりつく。議長のラウルの少々乱暴なそれでいて機転を利かせたリードのもとに、議定書の条項1「agreed」、条項2「agreed」、条項3「agreed」、とまるで神風ミッションのごとく、Noと言わせるすきも暇も与えず、高らかに槌の音を響き渡らせる。啞然とした各国の代表者たちもしまいには声をそろえ、条項26、条項27、最後の条項28もすべて「agreed」と唱えだしてしまう始末。その後ラウルによって、開発国はグリーンハウスガスの排出量を2010年までに5.2%削減、開発途上国の義務については条項より削除とし、こうして歴史的な京都議定書が成立。これはまさに長い混乱の後にやって来た“Golden Year of Agreement”の到来である。

京都議定書(1)

1997年12月の京都会議(COP3)で採択

○先進国の温室効果ガス排出量
先進国全体で少なくとも5%の削減を目標
各国毎に**法的拘束力のある数値目標設定**

対象ガス	CO ₂ , CH ₄ , N ₂ O, HFC, PFC, SF ₆
吸収源	森林等の吸収源によるCO ₂ 吸収量を算入
基準年	1990年(HFC, PFC, SF ₆ は1995年)
目標期間	2008年~2012年
数値目標	日本-6%, 米国-7%, EU-8%等

最後の場面はドンの妻シャーリーの独白からなり、ドンはその後、各国で開催された COP 会議を追いかけたが途中で倒れ、病院に運ばれてから6週間で亡くなってしまう。彼の肺は full of smoke に侵されていたが、それはまるで自分たちの古い車のようにもあり、また、この世の中もそうであるようだと言われ彼女は淡々と語る。ドンの雇用主である石油会社はドンの業績を認めながらも、しょせんは、彼も又多くの人材の一人にすぎなかったと言って去って行く。そしてラウルの議長職は Kyoto 会議が最後の役割になってしまう。



英国春秋あれこれ

COP3 1997年 京都議定書
先進国のみ（途上国は除く）国別温室効果ガスの削減数値目標設定

COP21 2015年 パリ条約
先進国・途上国ともに可能削減目標→実行
*地球温暖化を1.5度以下に抑える努力
*すべての国が温室効果ガス削減目標を5年ごとに提出・更新
*5年ごとに実施状況を確認（グローバル・ストックテイク）
*途上国への気候変動対策資金提供

COP28 2023年 ドバイ
*グローバル・ストックテイクの実行
*化石燃料からの脱却→エネルギーの転換

COP30 2025年 ベレン（ブラジル）
* ?

Tokyo College of Sushi & Washoku, London マスタークラスに参加して

吉村ウッド珠美

新年1月8日に、今年初めての二水会に参加させていただき、昨年ロンドンに開校された学校法人 水野学園、Tokyo College of Sushi & Washoku, London（東京すし和食調理専門学校 ロンドン）の渡辺 勝学長さまのお話を伺いました。

ご案内には、文化の多様性にあふれ、世界中の料理が食できるロンドンでもなかなか美味しい和食店に出会えない理由を、ロンドンで本格和食調理学校を運営される視点から、学校創立、開校にあたりチャレンジされたことやご苦労されたお話と共に語ってくださるとありました。最近、日本料理の世界の組織構造や板場さんの10年以上かかる修行の段階に沿った上下のヒエラルキー等の概念が変わって来ていて、最短時間で板前になれたり、海外で寿司職人になる人が増えていると聞いていましたので、そのような中、ロンドン初の日本料理の学校がどのように運営されているのか興味を持ちました。

渡辺先生は、大学で「有機化学」を専攻、靴やカバン職人養成や自転車を手作りする専門学校に携われ、食の道一筋ではないということでしたが、アメリカ留学中に日本文化の素晴らしさを再発見され、様々な手作りの文化に関わられていたそうです。ご自身の考え方や生き方から自然にロンドンで日本食の学校を開校されたという経緯にも大変関心を持ちました。

ご講話の始めは、水のお話からでした。油のフランス料理、火の中華料理、対して和食は水の料理なので、硬水の英国ではまず水が問題になってしまうそうです。確かに日本のお茶は、やはり日本の水で入れると美味しいし、紅茶はこちらの水の方が合っている感じがします。また、今まであまり考えず、パスタを茹でる時鍋にたっぷりの水と塩を入れていましたが、硬水の水道水を使う場合は塩は要らないと教えていただきました。イギリスで比較的柔らかいミネラルウォーターは、Volvic と Tesco の Ashbeck だそうです。

また西洋と東洋は何かにつけて反対のことが多いですが、お料理も西洋料理は「足していく料理」で、



和食は「引いていく料理」となるのだそうで、引いていくほどシンプルで素材本来の味を生かした料理に近づいていくため、食材も新鮮なものが必要になるということでした。

炭火で焼くと中から温まり、余分な油が出ていき、余分に落ちた油で煙が上がり燻製ができる。また、魚に大根おろしを加えて油っぽさを更に抜き、臭みをとる。そして、銀座のお寿司屋さんには、寿司ネタを最高に活かすため、すし飯に一番拘るのだそうです。このように、日本人は昔から素材本来の味を活かす様々な工夫を料理に取り入れてきたのです。

和食は低カロリーで、沢山の種類のお料理が食べられ、日本の高温多湿の気候のため昔から発酵食品も多く、腸内環境を整え



免疫効果を高めるので健康にも良く、その上プレゼンテーションも美しいため、世界中に広まってきました。お話を伺いながら、美味しそうなお料理のイメージが湧いてくるだけでなく、匂いまでも感じる気がしました。英国でも、「なんちゃってジャパニーズレストラン」を含め、あらゆる種類の日本食が食べられるようになりましたが、Tokyo College of Sushi & Washoku, London では、ただ技術的に日本食の作り方を学ぶだけでなく、本格的な日本の食に関する「心」も伝えられていると思います。

今回の講演の最後に「素晴らしい賞品が当たるクイズもあります」と伺っていましたが、そのクイズは「アジアを中心にお箸を使う国は多いですが、日本だけ箸を横に置くのはなぜでしょうか？」というものでした。

その時、私の脳裏には咄嗟に実家の大きなご仏壇や、茶懐石に使用される利休箸が浮かびました。物心ついた時から、毎日ご飯が炊けると一番に仏様にお供えしていました。お盆やお正月、ご法要の時など、訛った呼び方だと思いますが、母が「おりよくさん」と呼ぶ御霊供膳をお供えしていました。そこにも

お箸は仏様へ向いて横に置かれ、取りやすいようにお膳の縁にかけられていました。沢山の方々が、むしろプラクティカルなお答えをどんどんチャットに書き込まれる中、私も焦って「神様との関係」と書き込みました。本当は（後で調べたのですが）東京すし和食調理専門学校のサイトに記載されているように、日本古来からの考え方「神人供食」から、料理と食べる人の間に結界をつくり、料理を神聖な領域内に止め置くことが大切なため、お箸を境にしたということを書きたかったのです。他に「結界」と回答された方がいらっしゃったにも関わらず、私の答えも選んでいただき、幸運なことに『Tokyo College of Sushi & Washoku, London のマスタークラスをふたりで受講できる』という素敵なプライズをいただきました。



1月22日の夜、Westfield White City が出来て以来、どんどんビルが建ち変わり、BBC があつた頃とはすっかり変わって、見違えるほどモダンになったエリアにある学校へ息子と一緒に伺いました。

レッスンのテーマは「スーパーの食材で和食を作ろう」で、「和食は高級なものというイメージがありますが、少しの調味料と知識さえあればご家庭でも簡単においしい和食が作れることを知ってください」ということでした。学校には、ピカピカの大きな厨房がふたつあり、私たちふたりと Shida 先生（すしよし先生）だけでした。

すしよし先生は、学校の様子や包丁などお道具の話を交えられながら、お刺身、見た目も美しい和風サラダ、お吸い物、照り焼きチキンと副菜、ご飯とおまけにカレーまでつくってくださいました。

まずは、大根の桂剥きを見せてくださいました。静かな厨房に先生がよく研がれた包丁のスッスッ、シャッシャッというリズムカルな音が響き渡り、厨房の空気も変わったように感じました。みるみるうちに蛇腹切りされたきゅうりやトマトのサラダやりんごを使った白鳥が出来上がりました。食材の食感も音も、食材の切り方によって変わるのだそうです。

照り焼きチキンは M&S の鶏モモ肉の骨を取り、塩胡椒、小麦粉を塗り、出てきた油を丁寧に取りながら、皮を弱火で焦げ目がつくまで焼きました。焼いている音が高くなったら焼き目がついたと解るそうで、一旦取り出してタレを煮詰め、チキンを戻してツヤをつけました。火が通るまで煮て、美味しい照り焼きチキンが出来ました。



私は料理が全く得意ではなく、家で食べる日本食（らしきもの）は、ご飯とお味噌汁、簡単なおかずと野菜の主菜、サラダやちょっとした副菜くらいなので、子供にも料理を教えたい気持ちはあってもなかなか出来ていませんでした。

今回、準備から盛り付けまで丁寧に教えていただき、特に息子は普段適当な料理をつくる母からとは全く違う日本食について、見

て聞いて得るものが大きかった事と思います。

こちらで手に入る食材でも、立派で素敵な和食ができることを改めて教えていただき、私も今後は見た目にも綺麗な食事を心がけようと思いました。

またこの日は、偶然ですが私の誕生日でしたので、親子で日本の食の心に触れるという素晴らしいプレゼントをいただき大変嬉しく思いました。

今後とも先生方のご活躍、ご多幸と Tokyo College of Sushi & Washoku, London のご成功をお祈りいたします。

プライベートレッスンのような形で、お時間を割いていただきありがとうございました。



古典籍スクール 16

ブランド啓子

おぶさまさぶろうなごことば／まさま
男衾三郎絵詞/絵巻
 兄弟譚・観音靈驗譚

(1) 貴族文化と武士文化

今回は鎌倉時代の非常に興味深い絵巻物です。鎌倉時代は平安朝の貴族文化から鎌倉時代の武家文化への



優雅な吉見二郎とその妻、壁には楽器が立てかけられ、
 武具は隣の部屋に置いてあります

の過渡期でした。**武蔵**大介という有力武士の子に吉見二郎と男衾三郎という兄弟がいました。兄二郎は貴族趣味の優雅な生活をおくり、都から**上臈**（宮仕をしていた）を迎えて妻とし、**観音菩薩**に祈願して美しい姫「慈悲」を授かります。慈悲の美貌は関八州で評判となり、数ある求婚者の中で**上野国**の大名の子息・難波の太郎と幼いうちから婚約します。一方弟の三郎は、兄とは正反対の勇猛果敢な性格で、常に武芸に励み武具の手入れを怠りません。歌会などに興ずる寝殿造りの優雅な二郎宅に比べ、三郎の館では門の前を通るものは全て弓矢の標的にされ恐ろしい目にあうのです。



武具の手入れをしながら妻と語らう男衾三郎。子供達も縮れっ毛や天狗鼻

(2) 美の基準

男衾三郎は、わざわざ関八州で最も醜い女性を妻に選びます。身の丈七尺（2.1m）出張った頬、金壺眼、天狗鼻、縮れ髪。三人の男の子二人の女の子たちも皆、同じ顔をしています。これらは当時の醜い女性を表す記号的表現ですが、現代ではひょっとしたら個性的と言って、もてはやされるかもしれません。この絵巻で特徴的なのは、登場人物の表情が大変豊かなことです。子供を世話する侍女たちのクスクス笑い声が聞こえそう。

(2) 繼子いじめ

さて或る年の八月下旬、吉見二郎兄弟は大番の務めの為、兵を率いて上京しますが、遠江の高師山には、700人もの山賊がてぐすね引いて潜んでいました。でも手強い三郎の一行は避け、後発の吉見二郎 1000騎余りの軍勢に襲いかかり、とうとう二郎に瀕死の重傷を負わせてしまったのです。慌てて引き返して

きた三郎に「妻と娘をよろしく頼む、家と所領一箇所与えよ。三郎には所領三十六所また忠臣家継には



三郎の娘を一目見た国司は無言で逃げかえります

合わせには「母娘は亡くなった」と嘘をつき、新しい国司が吉見館を見ようと訪ねてきて、端女の中で働く「慈悲」を身染め、三郎に望みますが三郎の女房はなんとか自分の娘を飾り立て、身代わりにして押し付けようとします。でも、娘を一目見た国司は、無言のまま帰り臥せってしまいました。

物語の後半部分は失われ、どのような結末かは定かではありません。しかし、観音様が登場したことにより、他の靈験譚と同じように母娘は救われるであろうとの予測が成り立ちます。なんとももどかしいですね。

次回は物語を読んでみましょう。お楽しみに。

- 紙本著色男衾三郎絵詞 一卷紙本着色 29.3×1260.9 鎌倉時代・永仁三年
- (1295) 東京国立博物館
- A-11889

古典籍スクール 17

竹取物語

(1) 日本最古の物語

今回は平安時代のかぐや姫のお話「竹取物語」です。源氏物語 絵合の巻に「物語のいできはじめの祖(おや)」とされ、9世紀末から10世紀始め頃に成立し、作者不詳。主人公は構造上は、光る竹の中からかぐや姫を見つける竹取の翁(讃岐造/さぬきのみやつこ)の筈ですが、月の世界から地上に降りてきた輝くように美しいかぐや姫が中心となっています。内容はおおまかに五部に分けられ、①竹取の翁の紹介②求婚者たち③彼らの失敗譚④帝の求婚⑤姫の昇天について述べられ、その巧みな物語構成に驚かざるをえません。

(2) 否定の文学 月の世界と地上界の相反する価値観

さて、姫の評判を聞いて国中の男性が竹取の翁の家の狂乱のストーキングをはじめます。なんとか姫を一眼でも見ようと、男達は垣根や壁に穴を開け、地面を掘り、あらゆる手段を講じますが、無駄に終わります。この大騒ぎが一段落してもまだ頑張り続ける5人の公達(きんだち)。実はこの貴公子達の何人かは実在の人物だったことも突き止められています！* 姫は結婚の条件として、それぞれに次のもの(全て架空)を持ってくるように頼みます。

石作皇子(いしつくりのみこ):天竺(インド)の仏の石の鉢

阿部御主人(あべのみむらじ):唐土(中国)にいる火鼠の皮ごろも

大伴大納言（おおともだいなごん）：龍の首の五色の珠

車持皇子（くらもちのみこ）：東の海にある蓬莱山（ほうらいさん）の玉の枝

石上麻呂足（いそのかみのまる）：燕のもっている子安貝

お金や権力があっても、姫からの要求を誰一人として遂行できません。この5人が散々な目に遭って敗退した後、とうとう噂を聞きつけて帝が参入してきます。しかし地上の価値は異郷の人には全く通用しないのです。地上では権力の頂点にある帝も姫にとっては無力な存在でした。帝の前からさっと翳になり姿を消すかぐや姫。絶望する帝。しかし2人は歌を送り合う関係を続けます。

（3）かぐや姫の昇天 富士山の名の由来

姫が月の世界に帰る日、8月15日。天からのお迎えがやってきます。地上で長年育ったために、ものあはれにも感じ、人情をも理解するようになってしまった姫。自分が月の世界に戻った後の人々の悲しみをも案ずるようになります。竹取の翁と帝の配置した軍はなんの役にも立ちません。天人は姫に「早くなさい！、こんな穢れた世界にいたのですからこれを舐めて！」と持参した不老長寿の薬壺を舐めさせ、急いで全ての記憶を消し去る羽衣を着せかけます。姫はそれを制止し、帝への文をしたためます。「今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思いでける」（これまでの記憶を消す羽衣を着る時になって、あなたへの思いに気づきました）天人は衣を姫に着せ、薬壺に文を添えて頭中将に渡します。姫は天人に守られ月の世界へと帰ってしまいます。中将は帝にこの贈り物を届けます。帝は姫の歌を読み、涙に咽びながらも「あふことも涙に浮かぶ我が身には死なぬ薬もなにかはせむ」（あなたにあうこともかなわぬ今となっては不老長寿の薬にどんな意味があるのでしょうか）と詠みました。そして、天に一番近い駿河の山の山頂で歌と薬とを焼くようにと命じます。

この山が富士山です。その名は不二とも不死とも不尽とも言われ、いまだに文と薬とを焼く煙が立ち昇っているのです。**

地上界の人間にとっては心に染みる物語の終わりです。

注* 江戸時代の国学者加納諸平『竹取物語考』実在の3名について記録 播仁文庫 1926

** 九世紀は、大地動乱の時代であってとくに淳和天皇以降、噴火と地震の日常化は都市宮廷に大きな不安をあたえた。とくに九世紀半ば八六四年（貞観六）の富士の大噴火など。

降臨する天人たちを、見上げる翁たち（部分）

竹取物語デジタルライブラリー 立教大学蔵の「竹取物語絵巻」江戸時代（中前）の作



* 筆者 : 古典籍研究家

* 本文はJ C Z会報エーデルワイスよりの転載、筆者にて許可取得済み

開かれた男

石山望

私は、基本的に人を信用する人間である。

そんな手合いは、もちろん、昨今、インターネット詐欺師恰好の餌食。



この詐欺師たち、頭は非常に良く切れる。ただ、顔は絶対に見せない。そして、何より性格が悪い。多くの善良な市民の金を、うまく言って掠め取る。そんなことで「生計」を立てていて、気持ちがいいのであろうか。税金を一銭も払わない人生、

もし、彼らに子供がいるとしたら、子供の顔をまともに見られないのではな
いか。まあ、これらの詐欺師たち、その様な正常感覚は持ち合わせないとい
うことか、

1960年代の英国で、列車大強盗事件と言う有名な事件があったのを思い出
す。ロンドンからグラスゴーに向かう途中の現金輸送列車が10数人のギャ
ングに襲われ、莫大な金額の古札が盗まれた事件である。

今時の詐欺師は、その現代版と言うわけであるが、うんとスマート。

ただ、こんな物騒な世の中になってしまったのは噴飯物、なんとも嘆かわしい。何しろ、人をおいそれ
とは信用できないときている。

知らない人でも、簡単に家の中に入れてしまう様なお人好しの私であるが、77年11ヶ月の今まで、そ
のため被害を被ったことはない(例外的に、一度だけ、ちょっとした金額を掠めとられたことがあつ
たが、すぐに全額戻ってきた)。

それどころか、その「人を信用する」と言う性質に生まれついたことを嬉しくさえ思う。「人の懐に飛び
込む」と言うのか。

この性格のために失ったものより、得たものの方がはるかに大きい。変える気は毛頭はない。

これからも、あくまで、「開けた」人間で行く。まあ、私のこの歳では、変りようもないけれど、

私のこういう性格のおかげで、随分、良い友達にも恵まれた。日本でも英国でも。

もし、私が、もっと注意深く、また「閉ざされた」人間であったとすれば、今の様なゆったりとした生
活は望むべくもないのではなかろうか。いい友人も多いし、

昔、日本にいた頃、電車で、たまたま私の横に座られた人と親
交を結んだことを思い出す。謡の先生。

今では、まあ、さすがにそれはない。

インターネットが盛んになってせいぜい20年。世の中、非常
に便利になったが、その反面、極めて物騒にもなってしまった。

ああ、ヤダヤダ、

今度、詐欺師から電話がかかってきたら、「一度どこかでお茶
でも？」と誘ってみましょうか。

恥ずかし屋で、人前に入るのを極度に嫌われる人たちだから、
電話を切ってしまうだろうなあ、きっと、



影を慕いて

園部健治

今更、影を慕いてでもないであろうと思われても致し方あるまい。この歌が書かれた時代（昭和初期）の男女の恋愛事情や昭和歌謡についての考察を行うことが目的ではない。

古来、ものごとには光と影、陰と陽があるとされてきたし、今も変わっていないと思っている。そもそも、いつも日（光）の当たる場所ばかりを歩けるわけではないであろうし、一方で日陰の人生とはよく言ったものであるが、長い人生、そのいずれかしかないということもないのではないかと考えている。それでも、影・陰には、それこそ“暗い”イメージしかつきまとわないと受け取られることが圧倒的であろうが、それほどまでに遠ざけられる、忌み嫌われるものなのかというのが素朴な疑問である。



こんなことを思うに至ったのも、“The Dark Manifest”と題する本で言及されていた『陰翳礼賛（谷崎潤一郎）』を読んだからかもしれない。そして、何故かふと浮かんできたのが、この“影を慕いて”の歌であったのである。

この歌が今の世でヒットするか（受け入れられるか）どうか分からないが、当時から何か変わったものがあるのだろうか。あるとすれば、時代もさることながら、影・陰・暗さに対する日本人の心持ち、感受性ではないかと考えている。そういえば、私が小学生の頃、森進一が、この“影を慕いて”を歌っていたのを覚えているが、昭和の時代には、この歌（詞）を受け入れる素地が日本人にまだ残っていた証左ではないかと考えている。

そして、東京から暗さが消えたとして阿久 悠が作詞したとされる歌に“街の灯り（昭和48(1973)年）”がある。“灯り”にはどことなく“ほのぼのさ”を感じるのであるが、万博（昭和45(1970)年）を開催し、高度成長という右肩上がりの時代が続くと予感（期待）しうる時代の中で、ネオンが燦々と煌めいていた大都会の一部は別にしても、商店街が活気に溢れ、家（の照明）も明るくなるに連れ（それこそナショナルのコマーシャル（明るいナショナル）を思い出す）、日本人としての暗さに対する心持ち、感受性に変化を来したような気がするのである。

これに比べて、ヨーロッパの街並み、特に家の照明は今でも間接照明が多く、日本の家の（ヨーロッパに比べれば）眩しいほどの直接照明に比べれば何ともほのかな“灯り”といったイメージがついて回る。オランダに在勤していた時は自転車通勤をしていたのだが、勤務を終えて自宅へ帰る道すがら、（オランダの家の窓は大きく且つカーテンを閉めない文化があるから余計に、）大きな窓からほのかな灯りが見える家が殆どで、何ともほのぼのとした気持ちで自転車を漕いで家路についていたことを思い出す。日本との対比で何とも印象に残っている。



暗がりから明るいところはよく見える一方、明るいところから暗いところは見えにくいのは自然の摂理である。最近、スマホひたくり事件が相次いでいるが、そもそも暗い夜道での歩きスマホは、ここにスマホがありますよと無言の内に伝えているのに等しく、格好の獲物になってしまうのだろう。しかも、e-bike等で後方から近づいてくる犯人は黒ずくめの装束だと聞く。これでは気持ちがさらに落ち込んで仕方がない。

閑話休題。それぞれ生きる社会・時代には必ず影・陰（課題、問題、文脈によっては、闇かもしれない）があり、それらに目を瞑って（そらして）生きることにはできない。それでも、この世に影・陰はなく、あるのは全てが明るいものとして生きようとする、人は極力、暗さを避けるというより、暗さを見ないようになり、結果的に人として本来、（物事には、まさに光と影、陰と陽があるとの）弁えるべき感受性も消えてしまうことを嘆かわしく思うものである。それは自分が見たいものしか見ない、自分と異なる意見を受け付けられないとの傲慢さともいえる態度に繋がって行かないだろうか。

光と影、陰と陽とは異なるが、時代は何でも（明るくではなく）明らかにしなければならない、白黒つけなければならないような、最早、曖昧さが認められ難い世の中に向かって確実に流れている。善し悪しではなく、日本人だからこそできたのだろうが、日本人は白黒つけずに、ある意味、よく弁えて落とし所を見つけ、絶妙なバランス感覚で生きてきたと言えなくもない。

そもそも、この世の中は白黒どちらかしかない簡単に割り切れるものではなく、どちらとも曰く言い難い、灰色（グレー）の部分があるのは今も昔も変わらないのではないか。そうしたものがあるからこそ、人の世は面白くもあり、時に予期せぬ、時に残酷な結末になることもあるのだろう。表に出せない、隠れて見えない裏側に思いをいたすことを、そして、暗さの中に、暗さの中から見えるものが実は大切にしなければならないものではないかと思うことを日本人はいつの間にか止め、忘れてしまったのではないか。きちんと説明しなければならない世の中だからこそ、そうしたものを失うのは、自ら手放してしまうのは日本人として寂しい。そう考えると、「陰翳礼賛」とは言い得て妙である。日本人だからこそ理解出来る心持ちであり、これからも大切に持ち続けたいとの思いを強くしているところである。



英国を含め緯度が高い国（地域）では、寒さもそうだが、それ以上に暗さとの向き合い方が冬を乗り越える上で大切だとはよく言われることである。自分の影さえ見えない、気分を滅入らせるのに十分なロンドンの冬の天気であるが、少しずつ日が延び、明るくなるにつれ、気分も自然と高揚してくるから不思議なものである。

それにしても、最早、“影を慕いて”のような歌は生まれ難く、そして、それを感じ取り難い時代に生きていることを思うと、こうした歌が世に出てこないようになれば、日本人として至極残念ではないか。そんなことを思いつつ、Harrodsのネオンが映えるのを見ながら家路につく未だ暗いロンドンの冬である。



はじめての自伝

小川典子

2023年末の英国日本人会クリスマスパーティーで、ひとりの女性が私のところへいらして「私の名前はオガワノリコです」とおっしゃった。これが、英国春秋編集長・小川のり子さんとの出会い。イギリス在住で同姓同名、は格別である。意気投合した。のり子さんから原稿のお話を伺いうんちと迷っていると「ご自分のことをお書きになったら」と背中を押された。外国文化に深い興味をもって英国にいらしたのり子さん。私は、どうだろう。



私は、高度成長期、神奈川県川崎市で生まれ育った。東芝小向工場近くで自宅前に銭湯があり、煙突の避雷針がガラガラする。灰色の

空の下、らくだの腹巻に刺青姿の男性が洗面器を片手に通ってくる人情の厚い街だった。父は建設業を営み、母はピアノ教師で、妹がひとり。家にはピアノの生徒さんがレッスンにやってくる。黒板と磁石の音符にピアノが3台あった。両親が私に3冊の伝記を買ったのは、このころ。モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト…共通しているのは「音楽の都・ウィーン」。たちまち「私は将来、西洋に住む」と決めた。

小学生時代は、土曜日の午後、桐朋学園子どものための音楽教室に通い、おてんばなおちょこちょいで鳴らした。何度「不注意な間違いが多すぎます」と先生にたしなめられたことか。でも、音楽英才教育の殿堂では心を躍らせたものだ。絶対音感を隠す必要がなく、聴音（聴いた音を楽譜に書き下ろす）、ソルフェージュ（見た音符を歌う）で友だちと競うことが楽しくてたまらない。一方、初見（初めて見る楽譜で歌ったり弾いたりする）が苦手で、先生の前で音を立てて震えたこともある。数十年後、世界一初見力が優れた英国に来ると知っていれば、あの時もっと積極的に訓練をしたのに、と思う。

15歳、東京音楽大学付属高校に入学。今では定着した音大単語「演奏家コース」は、私が第一号。高校時代は友達に「大五郎」と呼ばれお調子者で通っていたが、海外留学への憧れと焦燥感がつり、泣いて止める両親を説得。

18歳。高校卒業後、アメリカ・ジュリアード音楽院へ。しかし、受け持ちの教授が病に倒れ、レッスンが極端に少ない学生生活を送り、仲間と摩天楼を歩き回ったことくらいしか思い出せない。そんなとき「イギリス人の先生」にピアノを聴いてもらう機会に恵まれた。イギリスに来るきっかけとなる運命の出会いである。ユダヤ系イギリス人ベンジャミン・キャプラン先生。私は長年の探し物を見つけた嬉しさから、レッスンで顔を紅潮させたことが忘れられない。



第3位に入賞してしまった。

アメリカから帰国した10ヶ月後、イギリスで奨学金を得てロンドン行きに搭乗。1987年6月末。初めて到着した日は、どんより薄暗く、肌寒かった。

キャプラン先生のレッスンに毎日通い、3ヶ月のち、リーズ国際ピアノコンクールへ。これまた寒い9月、リーズ行きの列車に乗った。所持金は、現金40ポンドと口座に7ポンド。それでも不安がなかったのは、イギリス人の前で弾けることが楽しみだったから。東京に帰る飛行機券を片手に、コンクールが終わったら潔く帰国する、と肝は据わっている。ところが、舞台に出ているうちに、あれよあれよと本選まで進み、

翌朝から、私の生活は一変。音大生から、プロのピアニストに大変身を遂げてしまっていた。以来、30数年。私の、英国と日本の二重生活が続いている。コンクールは優勝をして音楽家としてのキャリアが始まるものだが、リーズ国際コンクールは例外だ。聴衆の中に多くの音楽関係者たちがいて、「私は〇〇を招聘したい」と言う信念をもって聴いている。自分の耳を信じて、入賞順にこだわらない。私は第3位入賞だったのにも関わらず、予選の段階で音楽関係者たちから声をかけられるようになり、両手におさまらないほど多くの演奏会を手にするようになった。コンサートを弾くために、予定外のロンドン生活がスタートした。頂いた演奏会を弾くと、それが次の演奏会につながり、それを弾くと、また何処からかオファーが舞い込んでくる。30数年たった今も「入賞演奏会」を弾いている気持ちが取れないのは、そうした連鎖が、私のキャリアの礎になっているからだろう。

ピアニストの演奏形態は3種類。まずは「リサイタル」。休憩を入れて2時間の演目だ。思い入れの強い選曲をして、一人で楽器と対峙し、舞台上に置かれたピアノと共に思いのたけを披露する。

「室内楽」。ヴァイオリニストやチェリスト、声楽家や弦楽四重奏などの組み合わせで、演奏家たちと共演する。いつもひとりぼっちのピアニストにとって、室内楽は世界中の演奏家たちと知り合い、ネットワークを広げる機会である。

花形は「協奏曲（コンチェルト）」。

オーケストラをバックに、ベートーヴェンやチャイコフスキー、ショパンなど華やかな協奏曲をソリストとして演奏する。私の活動は、これに加え、英国ギルドホール音楽院での教鞭も比重を占めるようになった。実技試験が多く、学生の忙しさでは群を抜く音楽大学で、リハーサルからレッスンへ走り回る学生たちをつかまえるのが大変、と言う校風が自慢。

コンクール審査、と言う仕事も頂くようになった。2018年から6年間、日本最大級の浜松国際ピアノコンクールの審査委員長、また WFIMC 国際音楽コンクール世界連盟の役員を経験を経て、国際コンクール審査の席に座ることが多くなっている。

要約すると、私は拠点を英国と日本におき、演奏・教鞭・審査を3本柱に生きている、と言うわけである。特徴は、何事もないような二重生活をしていること。ロンドン・東京間を飛ぶことは日常で、一年に約1か月にあたる時間を空港や飛行機に費やし、服と楽譜はどこにあるのやら。スーツケースを詰め終わったときだけ部屋が片付くのは、旅の持ち物だけで生きているからなのかも知れない。



人の前に出ることが多いぶん、近くにいる家族や友人に不義理をし続け、いつも何か気がかりだ。一方、世界中に一生の友人と呼べる人たちがいる。多くの国での多くの出会いが、私の生活を感情豊かにしている実感は、代えがたいものがある。

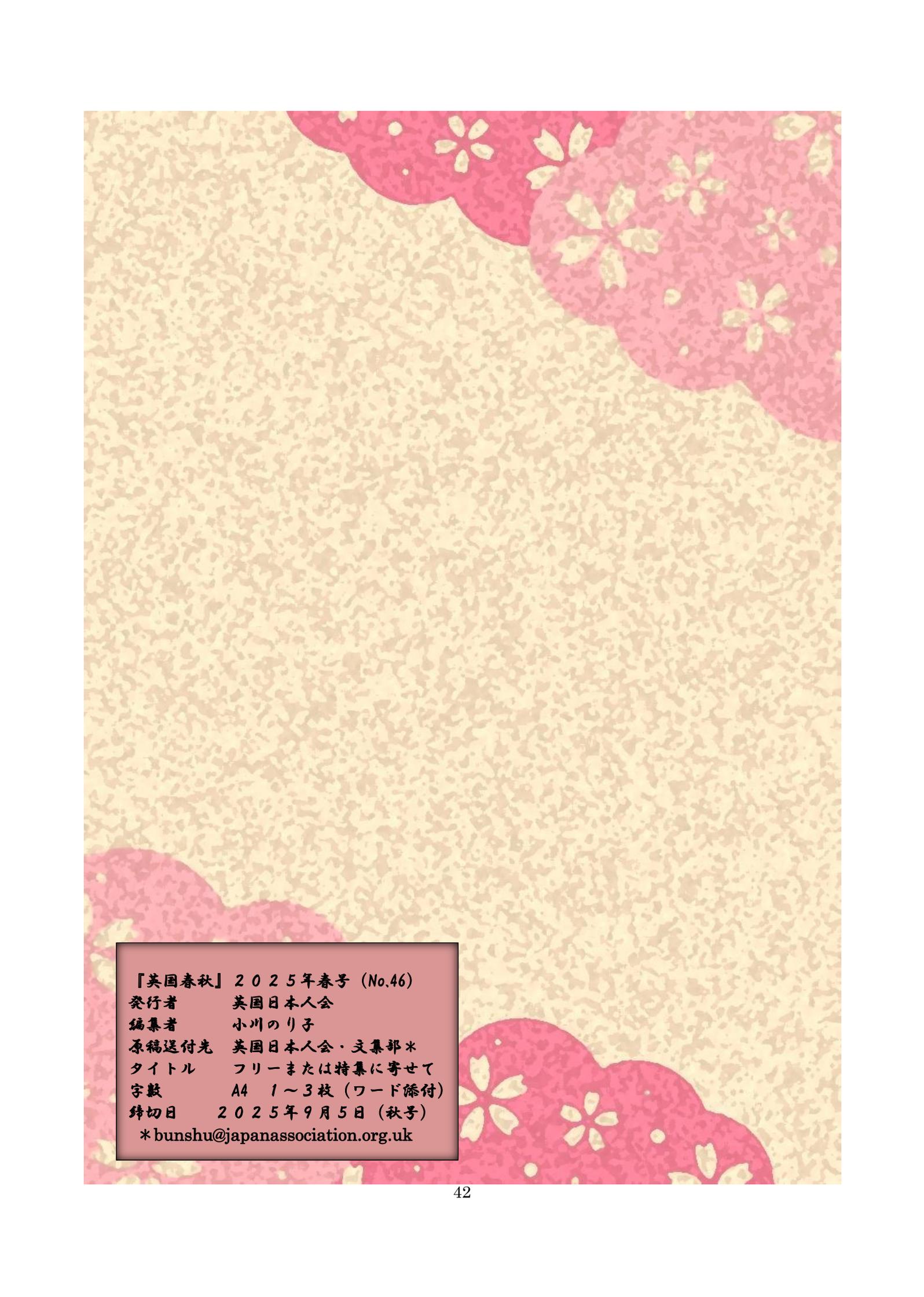
ピアノを通じてライフワークを見つけることもできた。デビュー当時、ロンドン北部マズウェルヒル (Muswell Hill) の大きな家には、音楽家夫婦と子どもが二人、オーペア2人と下宿人の私、7人が住んでいた。明るい5月に生まれたジェイミー君が、重度自閉症の障がいを持つと診断されたことが、私のライフワーク「ジェイミーのコンサート」につながっている。21年目に入るジェイミーのコンサート（ミュージア川崎市民交流室開催・ジェイミーUK不定期開催）は、私のライフワークとなっている。

「あなたのやりたいようにしたら良い」。英国でかけられた、忘れがたい一言。洗練された個人主義とイギリスの懐の深さに心からの感謝し、これを座右の銘にしてきた。ある日、ヨークシャーのリサイタルの前、会場練習をしていると、高齢の男性が歩み寄ってきた。「久しぶりだね。リーズ国際で君をブックキングしたのは、私だ。あの時、この子はピアノを弾き続けると思ったが、予感当たったね。第3位は、実力は優勝者とさほど劣らず、演奏料はリーズナブルで、喜んで弾いてくれる。」ユーモアに満ちた言葉は、私のイギリス音楽生活の恩人たちを感じる瞬間だった。

つい先週、川崎で、中学時代のクラス会に出席。公立中学校は生き方がさまざま。でも、一気にうちとけ、何時間も語り合った。合唱を歌い続けたクラスで、その音楽経験が私たちの心をひとつにしている。深く感じ入る機会だった。

イギリスと日本。「いったいどこに落ち着くつもり」と、尋ねられる。以前は答えられなかったが、今では、体力の続くかぎり二重生活を続けたい、と言えるようになった。予定外で始まったイギリス生活だが、続けてきた長年の音楽生活が、「オガワノリコ」のアイデンティティーをはっきりさせてくれたようだ。しばらく、演奏・教鞭・審査の3本柱を掲げながら、イギリスと日本で走り続けたいと思っている。





『英国春秋』 2025年春号 (No.46)
発行者 英国日本人会
編集者 小川のり子
原稿送付先 英国日本人会・文集部*
タイトル フリーまたは特集に寄せて
字数 A4 1～3枚 (ワード添付)
締切日 2025年9月5日 (秋号)
*bunshu@japanassociation.org.uk